

# 岡山大学構内遺跡調査研究年報 8

1990年度

1991年12月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

# 岡山大学構内遺跡調査研究年報 8

1990年度

1991年12月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



卷頭写真1 满4 b



卷頭写真2 满2 b

## 序

1989年度から1990年度前半にかけては、ちょうど規模の大きい発掘調査が途切れた時期で、発掘成果の展示会や遺物整理作業などにも力を注ぐことができました。

ところで、出土した土器や石器は、法律上、埋蔵文化財と呼ばれています。堅穴住居のような遺構も、土器が散布しているだけの遺跡もやはり、埋蔵文化財です。しかし例えば江戸や明治の絵画といったものは、すべて文化財というわけではなく、ごく一部の優れた作品のみが選ばれ、行政的な指定が行われてはじめて文化財となるわけです。

法律上の扱いはともかく、出土遺物や遺跡が広く文化財とみなされるためには、過去の歴史をたどる上でどれもが個性的な価値をもつということがやはり研究の上で明らかにされる必要があります。発掘調査後に行われる遺構・遺物の整理作業や報告書の刊行は、考古資料に新しい文化財としての価値を付け加えていくという意味でも、大切な意義をもっていると思われます。

1990年度後半からは、医学部構内鹿田遺跡でのアイソトープ総合センター建設地をはじめとして、再び大規模な発掘調査が続いていますが、発掘・整理作業の他にも、出土遺物の保存処理や調査成果の普及活動など、文化財保護に必要な事業をさらに多面的に進めていきたいと考えております。日頃から御指導・ご協力をたまわっている関係各機関・各位にお礼申し上げますとともに、今後の一層のご支援をお願いする次第です。

1991年12月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長

稻 田 孝 司

## 例　　言

- 1 本年報は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが岡山大学構内において1990年4月1日から1991年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査と保存、および活動成果をまとめたものである。
- 2 大学構内の埋蔵文化財の調査に際しては、設定基準を次のように定めた。
  - 1) 津島地区では、国土地理院第5座標系 ( $X = -144,500$ ,  $Y = -37,000$ ) を起点とし、真北を基軸とした構内座標を設置した。一辺50mの方形地区割である。また、同地区では調査の便宜上、大きく津島北地区と同南地区に二分する(図20-22)。
  - 2) 鹿田地区では、国土地理院第5座標系 ( $X = -149,800$ ,  $Y = -37,400$ ) を起点とし、座標軸を N 15° E に据ったものを基軸とした構内座標を設置した。地区割は一辺5mの方形を用いている。(図23)。
  - 3) 本文中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は真北を、他は磁北を使用している。
- 3 岡山大学構内の遺跡の名称は、周知の遺跡の場合はそのまま踏襲する。津島地区構内については、遺存する小字名を用いるか、岡山大学津島地区遺跡群と仮称してきたが、今後は、全城を「津島岡大遺跡」と総称する。他地区は任意の名称で仮称する。
- 4 調査名称は、「発掘調査」に分類したものについては、各遺跡毎に調査順に従って次番号で呼称し、「試掘調査など」に分類したものは、任意の名称を用いる。発掘調査のうち、小規模で、試掘調査から連続して調査したもの、試掘調査を経ず調査したものは、「試掘調査など」に分類する。
- 6 「発掘調査」についての記述は現段階における概要であり、精確な詳細は正式報告によって頂きたい。「試掘調査など」については、本年報での記述を正式報告にかえる。
- 4 表に記載した所属部は、原則として各学部の頭文字を略号として用いている。
- 5 本文・月次・挿図・写真などで使用の調査番号は表1と一致する。
- 7 本文は、網川一徳・土井基司・富樫孝志・松木武彦・山本悦世・若林卓が分担執筆し、執筆者名は末尾に記した。
- 8 編集は稻田孝司センター長の指導のもとに、山本の協力を得て、土井が担当した。
- 9 本年報に掲載の津島地区的地形図は岡山市発行の1/2500の地図を複製したものである。
- 10 調査・整理において以下の方々にご援助・教示を頂いた。記して感謝申し上げる。  
亀田修一、川崎保、河瀬正利、北野信彦、久保稼二郎、河本清、粉川畠平、近藤義郎、谷山雅彦、千葉豊、出原恵三、中井信之、中原齊、能城修一、橋口達也、橋本久和、平井勝、松谷曉子、村上幸雄、村山秀石

## 岡山大学構内遺跡調査研究年報8 1990年度

### 目 次

第1章 1990年度岡山大学構内遺跡調査報告	1
1 調査の概要	1
2 発掘調査	1
① 津島 5次調査<大学院自然科学研究科棟>共同溝・検水槽	1
② 鹿田 6次調査<アイソトープ総合センター予定地>	5
3 試掘調査など	9
③ 学生合宿所ポンプ槽予定地	9
④ 資源生物科学研究所内遺跡確認調査	11
⑤ アイソトープ総合センター予定地	13
⑥ 福利厚生施設予定地	14
4 立会調査	17
(1) 津島地区	17
(2) 鹿田地区	18
第2章 1990年度普及・研究・資料整理活動	25
1 資料整理	25
2 分析依頼	25
3 刊行物	25
4 調査員の活動	26
5 日誌抄	27
6 遺物収蔵量および保管施設	28
7 展示会	30
第3章 1990年度構内遺跡の調査および活動のまとめ	32
附 表	33
岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項	40
1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規定	40
2 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規定	41
3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規定	41

1990年度埋蔵文化財調査研究センター組織	43
1 センター組織一覧	43
2 管理委員会	43
3 運営委員会	44
附録	45

## 挿図目次

図1 大学院自然科学研究科棟 共同溝・検水槽 調査地点図	1
図2 上層断面図	3
図3 溝1・2平面図	3
図4 出上遺物	4
図5 アイストープ総合センター 上層断面柱状図	5
図6 造構配置図	6
図7 出土遺物	8
図8 学生合宿所ポンプ機予定地 調査地点図	9
図9 土層断面図	10
図10 資源生物科学研究所内遺跡確認調査 調査地区位置図	11
図11 調査地点図	12
図12 土層断面図	12
図13 アイストープ総合センター予定地 調査地点図	13
図14 調査区平面図	14
図15 東壁土層断面図	14
図16 福利厚生施設予定地 調査地点図	14
図17 土層断面柱状図	15
図18 造構検出状況	16
図19 調査⑥土層柱状図	17

図20 津島地区全体図	21
図21 津島北地区	22
図22 津島南地区	23
図23 鹿山地区全体図	24
図24 展示会場見取図	31

### 写 真 目 次

巻頭写真1 アイソトープ総合センター 溝4 b

巻頭写真2 溝2 b 土器出土状況

写真1 大学院自然科学研究科棟 共同溝・検水槽 検水槽東壁	2
写真2 アイソトープ総合センター 溝1断面	4
写真3 溝2断面	4
写真4 溝4断面	7
写真5 井戸1	7
写真6 井戸1 土器出土状況	7
写真7 福利厚生施設予定地 溝1検出状況	16

### 表 目 次

表1 1990年度調査一覧	19
表2 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要	28

附表 1	1982年度以前の構内主要調査 (1980～1982年度)	33
附表 2	1989年度以前の構内主要調査 (1983～1989年度)	33
附表 2-(1)	発掘調査	33
附表 2-(2)	試掘調査など	34
附表 2-(3)	立会調査	35
附表 3	埋蔵文化財調査室刊行物	39
附表 4	埋蔵文化財調査研究センター刊行物	39

## 第1章 1990年度岡山大学構内遺跡調査報告

### 1 調査の概要（表1、図20～23）

当センターにおいては、大学構内における掘削工事に際して、事務局施設部企画課を通して事務的手続きを行った上で、発掘・試掘・立会調査にわけて調査を実施している。

現在までのところ、その調査対象は津島地区と鹿田地区が中心となっている。特に、鹿田地区は周知の遺跡（鹿田遺跡）として、掘削工事に対して届出を提出した上で対応を行っている。また、津島地区においても新たな遺跡の確認が進んでいることから、届出の有無にかかわらず、少なくとも立会調査を行っている。

1990年度は発掘調査2件（津島地区1件・鹿田地区1件）、試掘調査など4件（津島地区2件・鹿田地区1件・倉敷地区1件）、立会調査44件（津島地区40件・鹿田地区4件）を実施した。詳細は表1に挙げた。

なお、津島地区については、ながらく遺跡名称が定まっていなかったが、今後、「津島岡大遺跡」と総称する。  
(土井)

### 2 発掘調査

#### ① 津島岡大5次調査<大学院自然科学研究科棟>共同溝・検水槽（津島北地区AY・AZ08区）調査の経過（図1）

この調査は、大学院自然科学研究科棟建物本体部に隣接して建設される、共同溝および検水槽の工事部分に対して行なったものである。本体部分については、1988年6月から89年3月にかけて発掘調査を実施している。

共同溝工事部分のうち、その本体部との接続部については、本体部とあわせて発掘調査を行なったが、共同溝自体に関しては、工事規模が狭小かつ浅いこと、配管等による搅乱が随所にあると予想されることから、立会調査による対応を予定していた。しかし、設計図面が完成した段階で、工事に伴う掘削が、1988年時点の計画より深く、現地表下約4mに及ぶことが判明した。そのため、急遽、設計変更を申し入れ、掘削深度を最小限に押さえたうえで、回避不可能な部分に関して発掘調査を実施した。

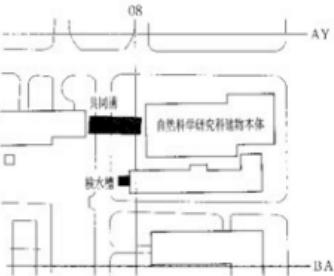


図1 調査地点図 (縮尺1/2400)

共同溝部分の調査区は、本体部建物西辺に既に建設済みの本体接続部分に西接して、東西約17m、南北約5mに設定した。ただし、造成土部分に法面およびテラスを設けたためと、東西両端が既設施設の擾乱部分にかかるため、実質的調査範囲は東西約12m、南北約2.8mである。造成土および擾乱土は重機を用いて除去し、2層の近代耕作土層以下は手掘りで分層発掘を行なった。10層（古代）上面まで調査した段階で、2ヶ所に深掘トレンチを入れた。深掘の結果、本体部調査区と同様の層序が観察されたこと、工事による破壊が10層以下には及ばないことから、掘下げはその状態で停止し、記録を取ったのち調査を終了した。

検水槽部分の調査区は、本体部南側の木造建物の西隣に位置し、範囲は東西約2m、南北約2.5mである。重機によって造成土を除去したのち人力で掘下げた。縄文時代後期以前の堆積砂層上部と思われる20層上面までは全面を調査し、以下については、調査区東・西壁沿いに深掘を行なった。その結果、遺構は認められなかったものの、20a層の上面付近に限って、縄文後期土器を包含することがわかったため、若干掘下げ、遺物が認められなくなつたレベルで調査を終了した。

調査期間は1990年4月3日～4月21日である。

#### 層序と地形（写真1、図2）

調査区付近の現地表は標高4.5m～4.7mを測る。1層は造成土で2層はその直下の近代耕作土である。3層以下10層まで、遺物に乏しいため、正確な時期比定は難しいが、3～5層は近世、6～8層は中世、9層は中世または古代、10層は古代の水田層と考えられる。

共同溝調査区では、12層から18層まで粘質土の水平な堆積が連続し、その下に19層の砂層が続く。遺物は出土していないが、本体部調査区層序との対応により、12～14層は弥生時代後期、15～18層は弥生中期～前期に属し、19層は弥生前期の河道を埋積する砂層に相当する。

検水槽調査区では、粘質土の水平堆積は9層で終わる。11層は本体部の調査では認められなかつた層であり、恐らく、検水槽調査区の南方に広がる。出土遺物より6世紀末～7世紀初めの洪水砂と捉えている。この調査区では弥生時代の層が存在せず、11層直下に、縄文時代後期



写真1 検水槽東壁（西から）

前半以前に堆積した砂および砂礫層の20層が高地部を形成している。土層が南西方向へ落ち込む状況が看取されることから、その方向へと谷状に落ち込む旧地形が想定されよう。20a層の南西隅には、漸移的に変化して黒色味と粘性を帯びる部分20a'層が認められるが、その南西に下る旧地形に関係した現象と理解しておきたい。

以上、本体部調査結果から推定したとおり、北側

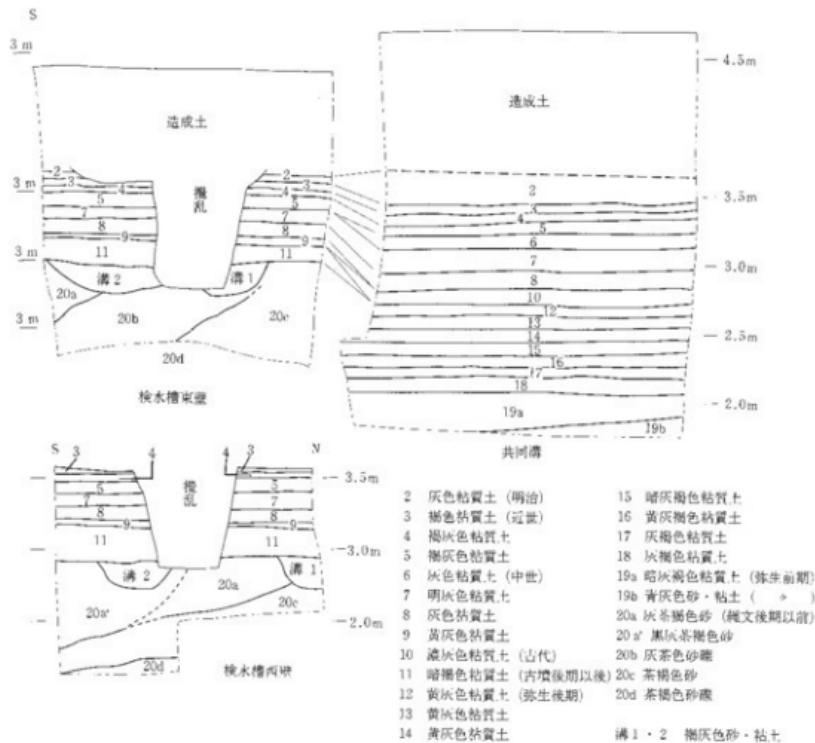


図2 土層断面図 (縮尺1/40)

の共同溝調査区は東西に走る河道の低位部に、検水槽調査区はその南側に形成された微高地に位置することが明らかになった。

### 遺構と遺物（写真2・3、図3・4）

今回の調査で確認した遺構は、検水槽調査区において20a層上面で検出した溝2条である。溝1は現状で幅60cm、深さ20cmを測る。溝2もほぼ同規模であるが、東側がやや幅広になる様相を示す。溝の走向はおよそ東南東から西北西で、推定される微高地の伸びる方向にはほぼ一致する。出土遺物や層位から、両溝とも古墳時代後期、7世紀初め以前と推測している。ただし



图 3 清 1 : 2 平面图 (续 1 / 10)



写真2 溝1断面 (南から)



写真3 溝2断面 (東から)

相異なる2時期の溝が切り合っているのか、同時併存か、ちょうど両溝が接するあたりが擾乱されているために明らかにしえなかつた。後者の場合、二股に分岐する溝とも考えられる。性格も現状では不明と云わざるをえないが、水田經營に関連する施設の可能性は残される。

遺物は、11層までの各層と20a層上面付近から、総量281コンテナ1/3箱程の土器片が出土した。ただし、細片が多く、図示できるものは僅かである。4は須恵器甕の胴部で溝2から出土した。1・2は7層出土の土師質椀・小皿である。3は須恵器杯身で11層よりの出土である。11層からは他の層と比較して多くの土器が出土した。5~7は後期前半に属する縄文土器で、深鉢の口縁部と思われる。20a層上面付近から出土した。1は共同溝、他は検水槽調査区の出土である。

### まとめ

今回の調査では、本体部調査区におけるそれにはほぼ合致する土層堆積状況が確認され、予想どおり、共同溝調査区は河道の低地部に、検水槽調査区は微高地部にあたることが判明した。微高地部の北側では弥生時代以来連續と水田が営まれた状況を確認しているが、微高地の頂部では弥生時代~古墳時代の水田層は失われているようである。そして、微高地のすぐ南方に別

の低地部の存在を推測する材料を得たことは、新たな知見として評価されよう。また、6世紀末から7世紀初めの洪水砂と推定した11層の存在は、一般に古墳時代層の遺存状態が良くない津島構内にあって、検水槽調査区の南に、洪水砂に覆われた、水田跡等の該期の良好な遺構が展開する可能性を示唆する。特に、溝1・2が水田関連遺構ならば、水田と水利施設との有機的関係が捉えられる可能性があろう。（若林）

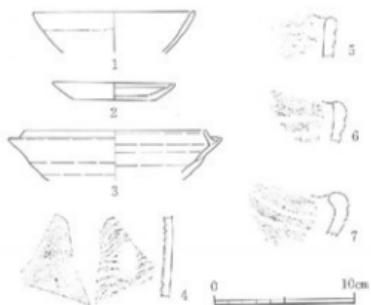


図4 出土遺物 (縮尺1/4)

## (2) 鹿田6次調査&lt;アイソトープ総合センター&gt;(鹿田地区BW~CC67~71区)

## 調査の経過(図23)

アイソトープ総合センターの新館に先立ち、医学部構内の建設予定地において1990年10月に試掘調査を実施したところ、中世の遺構および包含層の存在が確認され、1990年度に発掘調査を実施することとなった。調査期間は1990年11月20日から1991年4月末日までの予定であったが、中世の遺構密度が予想以上に高く、また試掘では確認されなかつた弥生時代末～古墳時代前半の遺構・遺物の存在が明らかになったため、調査期間を6月30日まで延長した。調査面積は約690m<sup>2</sup>で、2名の調査員が担当した。本年度末現在、5層上面(中世)の調査途中である。

## 層序と地形(図5)

鹿田遺跡の基本層序は、1983年から1984年に行なわれた外来診療棟用地の発掘調査時に設定されている。<sup>(註2)</sup>この基本層序と本調査での層序との対応関係は、基本層序第Ⅰ層(造成土)が本調査の1層に当たり、以下第Ⅱ層(近代の水山土壤)が2・3層、第Ⅲ層(中世包含層)が4～6層、第Ⅴ層(弥生時代～古墳時代初頭)が7～9層、第Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ層(無遺物層)が各々10・11・12層に相応するが、第Ⅳ層(古代末～中世)に当たる層はここでは存在しない。

本遺跡の層序についてやや詳しく述べると、まず中世包含層のうち4層は褐灰色砂質土の薄い層で、確認されない部分もある。5層と6層とは灰褐色砂質土層で、後者の方が鉄分沈着が多い。中世の遺構の多くは4層から切り込まれていると考えられるが、グライ化などのために確認が困難なことから、実際には5層上面、場所によっては6層上面で検出を行なう結果となった。これらの中世包含層の上面は、調査区南壁の中央部(69ライン付近)でもっとも高く、

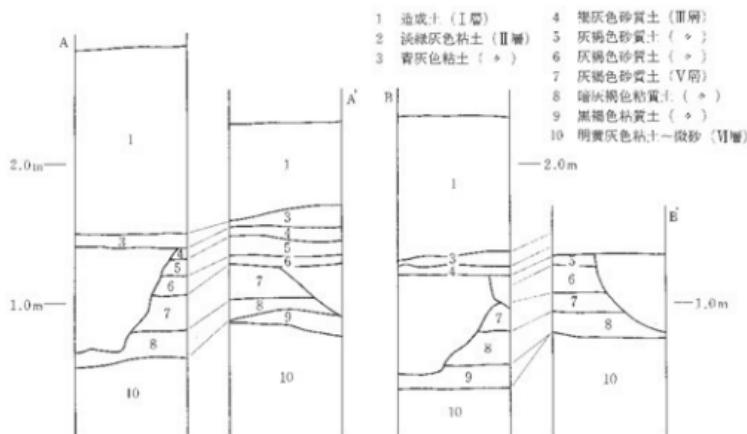


図5 土層断面柱状図 (縮尺1/40) 断面位置は図6参照

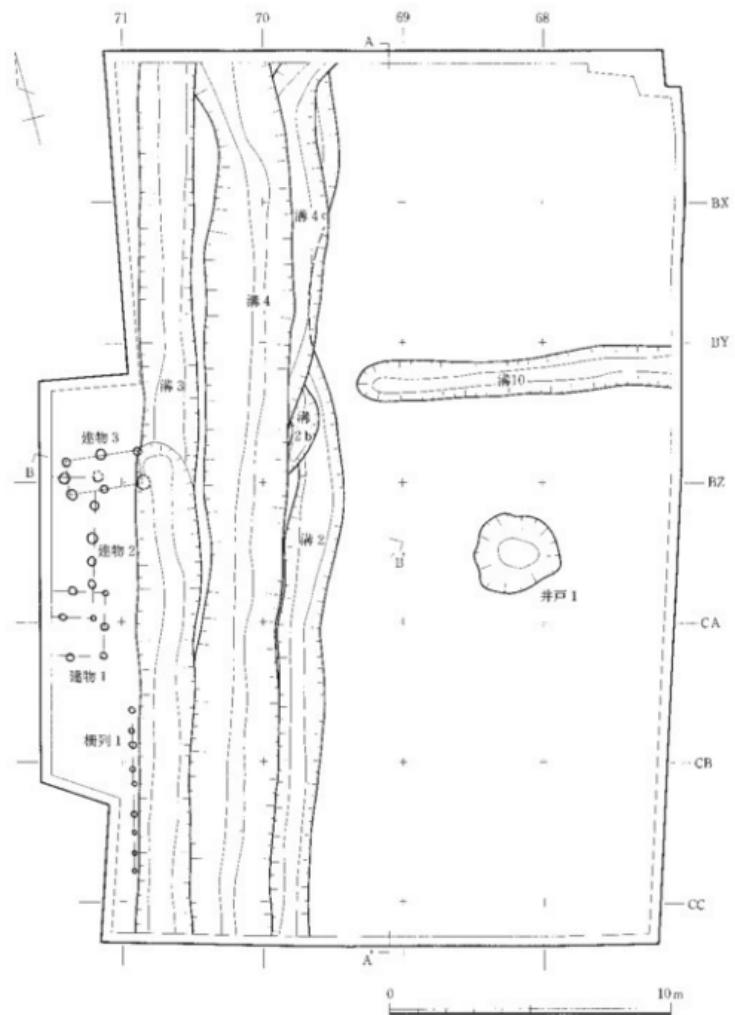


図 6 遺構配置図 (縮尺 1/200)

調査区の北西隅付近が低い。基盤層上面の地形を反映したものと考えられよう。弥生時代末～古墳時代前半包含層の詳細な検討は次年度に持ち越されることになるが、トレンチなどによって判明したところによると、7層は灰褐色砂質土層でマンガンの沈着が著しく、8層は暗灰褐色粘質土層、9層は黒褐色粘質土層である。それより下の基盤層については10層が明黄灰色粘土～微砂層、11層が青灰色粘土層、12層が青灰色砂の湧水層である。

#### 調査の概要（巻頭写真1・2、写真4・5・6、図6）

中世層上面において3月末までに確認できた遺構は溝6本以上、井戸1、土坑1、掘立柱建物3、横列1である（図6）。

溝は南北方向に5本以上、東西方向に1本を確認しているが、精査の進展によってこれより増加することは確実である。調査区西半部で確認した南北方向の溝4本（溝3、4、4c、2）はとくに規模が大きく（巻頭写真1、写真4）、切合関係からみて西方のものほど新しい。これらの溝は、出土遺物から判断してさほどどの時期差が認められず、短期間のうちに頻繁に掘りかえられたものと推測できる。溝の用途・機能の問題とあいまって、その解釈は今後の課題である。

掘立柱建物跡は調査区の西半部で3棟が確認された。3棟の大きさはそれぞれ2×1間、5×2間以上、2×2間以上であるが、柱穴の径や木柱の痕跡などから判断してさほど大規模な構造の建物は想定しがたい。さらに、溝3の肩に沿って少なくとも9基のビットが一直線に並ぶ状況が認められ、横列と判断した。建物や横列の数は、調査区東半部の精査の進展にしたがって今後増加する可能性が強い。

井戸は底面や全体の構造の把握が未了であるが、検出面での径約3mを計る素掘りの井戸である（写真5）。切合関係からみて中世包含層上面の遺構群のうちではもっとも新しい。土坑については調査途中で、図面にはのせていない。詳細は次年度に持ち越されよう。

遺物は土器類を中心に各遺構や包含層から出土している（図7）。土師質の高台付椀、皿、鍋、鉢が多く、ほかに瓦器椀や、壺や鉢を中心とした備前焼、亀山焼、東播系などの陶器片、白磁・青磁片が加わる。溝や井戸から出土するものの中には、まとめて廃棄された可能性の高



写真4 溝4断面（北から）

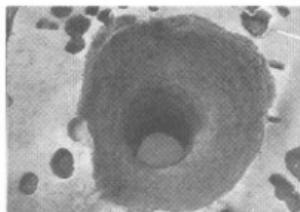


写真5 井戸1（東から）

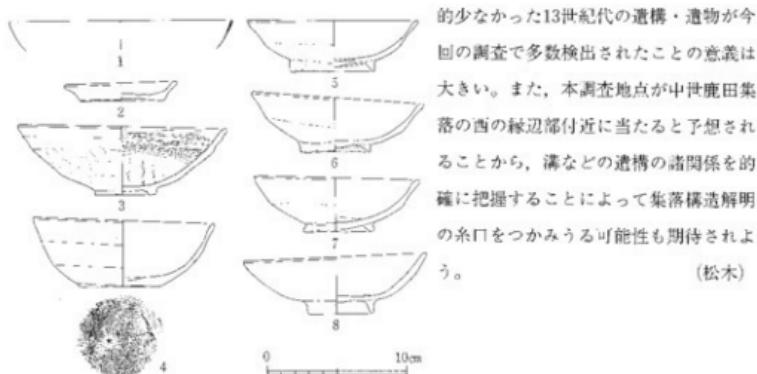


写真6 井戸1土器出土状況（南から）

い土器群も認められ、一括資料としての活用が期待できる。とりわけ溝2bで土師器皿20枚が鐵錫状の有機物に包まれた状態で検出されたのは特筆されよう(図7-2、巻頭写真2)。また、井戸1中層からは土師質および備前焼の碗が5枚重なった状態で出土した(図7-4~8写真6)。そのほか、特異な遺物としては、溝4から出土した青銅製鏡がある(図7-1)。これらの遺物はほぼ13世紀代に比定され、その中の明瞭な時期差は今のところ認められない。

### まとめ

以上のように、今後の調査の進展によってある程度の変更が予測されるとはいっても、本調査区内の中世遺構の大要は本年度中にほぼ把握できたと考えている。鹿田遺跡における中世の集落の実態は、各地点の調査によって次第に明らかになりつつあるが、そういう中でこれまで比較



番号	種類	法 面 寸 径 幅 高 さ 高 度			形態・手法の特徴ほか	色 調 版 土	
		口径	底径	高さ			
1	青銅製 鏡	17.0	—	—	内外面ともにやや薄、折方向に研磨痕	暗 緑	—
2	土師質 盆	8.2	6.0	1.5	強い横模様、外沿にハサウエーリング	淡黄灰	黒 斑少、純良
3	瓦 壁 等	15.0	4.3	5.0	内面模様(複数)、外面上半部模様、下半部特に「切妻型」	墨 灰	精良
4	須恵質 瓢	13.1	6.0	4.9	強い横模様、裏面裏面にハサウエーリング(僅前後)	灰 白	純良
5	土師質 瓢	12.2	6.1	3.7	内面模様、外腹下半部に押出し	淡黄灰	黒 斑少、純良
6	○ *	12.5	5.0	4.0	内外部模様、外腹と底部内側に押出し	淡黄灰	細粒全、やや粗
7	△ *	11.7	5.1	3.5	内外部模様、外腹下半部に押出し	墨 灰	純良、やや粗
8	○ *	12.6	4.8	4.1	内外部模様、外腹に弱い押出し	淡黄灰	黒 斑少、やや粗

※法量( ) 内数字は底上直径による推定値

図7 出土遺物 (縮尺1/4) 1 溝4 2・3 溝2b 4~8 井戸1

### 3 試掘調査など

今年度は岡山大学構内において、4件の試掘調査を行った（表1）。倉敷地区、鹿山地区でそれぞれ1件、津島地区で2件である。

③の学生合宿所ポンプ槽の調査はきわめて小規模ではあったが、前年度の試掘調査で、近接地に繩文晩期～弥生前期の包含層が良好な状況で確認されており、発掘調査を行った。④の資源生物科学研究所内の確認調査は、倉敷地区での初めての調査であり、倉敷川流域の遺跡の南限を知るための貴重な資料を得ることができた。⑤のアイソトープ総合センター予定地は、埋蔵文化財調査室設置の契機となった動物実験施設に北接し、その時の岡山市による立会調査の結果とほぼ一致する結果を得た。本年度中に既に本調査に入っており、詳細は前述のとおりである。⑥の福利厚生施設予定地の調査では、1987年度の情報処理センター予定地の調査、1989年度の図書館予定地の調査と合わせて、津島北地区北西部に比較的安定した微高地のあることが確認された。

#### ③ 学生合宿所ポンプ槽予定地（津島南地区 BD02区）

##### 調査に至る経過

岡山市津島東4丁目の市道木町津島東線の幅員拡幅に伴い、拡幅部分に取り込まれる岡山大学学生合宿所を解体、撤去する必要が生じたため、岡山市による補償措置として、新たな合宿所が建設されることになった。

当予定地では、すでに1989年9月に、合宿所本体部分の試掘調査が行われているが、その後、ポンプ槽の建設に伴う掘削が地表下2.5mに及ぶことが明かとなつたため、該当する予定地も新たに試掘調査を行う必要が生じ、急速、調査を実施することになった。

##### 調査の方法（図8）

本試掘地点は岡山大学津島南地区の東端、サッカースタジアム南側に

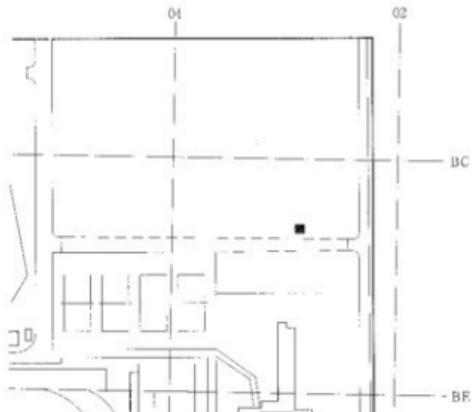


図8 調査地点図 (縮尺1/2400)

位置する。当初、ポンプ槽建設予定地に、造成土部分  $5 \times 5$  m, 以下  $3 \times 3$  m (ポンプ槽底部分) の調査区を設定する予定であったが、調査区内の大部分に旧建物のコンクリート基礎が残置しており、その底面は14層中にまで及んでいたため、急速調査計画を変更して、残存部分のみを精査することとなった。従って、実質的な調査面積は  $1.5m \times 3m$  であり、作業のほとんどは14層以下の精査、壁面観察（北壁）のみに終始することとなった。最大掘り下げ深度はGL下  $2.5m$  で、調査期間は1990年5月7日～17日である。

### 層序 (図9)

1層は造成土、2層は明治水田層である。遺物僅少で詳しい時期は不明だが、他地点との比較などから、3層～5層は近世、6層～7層は中世、8層は古代の水田層と考えられる。8b層は層界の形状が不定形で、下部に下層の上粒が巻き込まれており、また、砂質土を含まず、

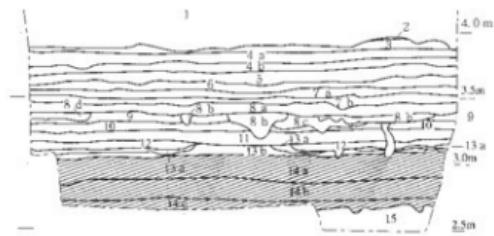


図9 北壁土層図 (縮尺1/40)

\*七百番の注記は「新版源本大色鉛」による

- 1 造成土
- 2 明治水田層
- 3 古褐色シルト質粘土 (2.5Y5/3.SIL) 2層との層界不明瞭。FeO汚染帯状斑駁
- 4a ナリープ褐色シルト質粘土 (2.5Y4/3.SIL) 4a層との層界不明瞭。帯状斑駁
- 4b ナリープ褐色シルト質粘土 (2.5Y4/3.CL) 4b層との層界不明瞭。帯状斑駁
- 5 にぶい古褐色シルト質粘土 (10Y2E/4.SICL) 4d層との層界不明瞭。帯状斑駁
- 6 オリーブ褐色シルト質粘土 (2.5Y4/3.SICL) 5層との層界良。香状。ウン管状斑駁
- 7a 房オリーブ色粘土 (15Y5/2.CL) 6層との層界不明瞭。ウン管状斑駁
- 7b 房オリーブ色粘土質粘土 (3Y2/2.NIL) 7a層との層界不明瞭。やや色調が明るくなり、粘性が強まる。ウン管状斑駁
- 8a 黄褐色シルト質粘土 (2.5Y4/2.SIC) 7B層との層界明瞭。ウン管状斑駁
- 8b ナリープ褐色シルト質粘土 (2.5Y4/3.SIC) 壕壁の壊乱。
- 9 棕褐色シルト質粘土 (10Y4/4.NICL) 8a層との層界や直。ウン管状斑駁
- 10 古褐色シルト質粘土 (2.5Y5/3.SL) 9層との層界良。ウン管状斑駁
- 11 古褐色シルト質粘土 (2.5Y5/3.SH) 10層との層界良。ウン管状斑駁
- 12 四周古褐色シルト質粘土 (2.5Y4/2.NIL) 11層との層界良。以下ウン管状斑駁減少
- 13a 黑褐色壤土 (10Y2E/3.L) 12層との層界明瞭
- 13b 黑褐色壤土 (10Y2E/2.L) 13a層との層界良
- 14a 黑褐色シルト質粘土 (2.5YR2/1.SIL) 13b層との層界明瞭
- 14b 黑褐色シルト質粘土 (7.5YR3/1.SCL) 14b層との層界不明瞭
- 14c 黑褐色シルト質粘土 (10YR3/2.SIC) 14b層との層界良
- 15 種糞古褐色砂質粘土 (2.5Y4/2.SCL) 14c層との層界良

溝や自然流路とは考えられないことなどから、樹根の擾乱と考えられる。8c層は、9層に感じが似ているが、溝や水田の畠畔関連の遺構である可能性は少なく、むしろ8b層と同じ様な性格が考えられる。8d層は溝の埋土と考えられ、全体的に他の層と比較して柔らかく、明らかに砂質が強い。遺物は認められなかつた。西壁につながりを確認できず、従って、南北方向に延びる可能性が強い。9層～12層は弥生時代に属すと思われる。14層はいわゆる「黒色土」で、縄文時代後半から弥生時代前期にかけて形成された層である。15層以下は縄文時代後期以前に堆積した基盤層である。

### 遺構と遺物

本調査においては、出土遺物も僅少であり、土師質椀、土師質釜等の細片が数点出土したのみである。いずれも中世以降のものと考えられる。

遺構としては、溝埋上と考えられる8d層を確認することができた。この溝の上半は7層によって切られている。また、13層において畦畔らしき高まりを北壁で確認することができた。1989年度に行われた試掘調査においてもこの層の上面より畦畔を検出しており、位置的な関係においても同一時期のものと考えられる。ここでも1989年度試掘時と同様、突帯文期～弥生時代前期の年代幅を与えておきたい。その他、8層上面においても幅1mほどの高まりを認めえたが、畦畔であるかどうかは不明であり、また、周囲の壁面においてもその続きを認めることはできなかった。

### まとめ

本調査では大規模な擾乱のため、平面的な遺構検出を果たし得なかったが、調査所見として以下の点を指摘することができる。まず、13層において確認された畦畔状の高まりから、本調査地点には1989年度試掘調査で明らかになった13層上面検出水田の広がりを追認し得ること。14層以下の堆積状況からみて、本調査地点は微高地に位置しており、縄文時代後期から晩期にかけての遺構が存在しうる可能性が高いこと。また、8d層において確認した溝状遺構の存在は13層以外にも良好な水田遺構が遺存している可能性を示している。

(綾川)

### ④ 資源生物科学研究所内遺跡確認調査

(倉敷地区)

#### 調査の経過 (図10, 11)

当センターでは、資源生物科学研究所内に遺跡が存在するかどうかの確認調査について、数年前から依頼されていたが、今年度になって試掘調査を実施することにした。倉敷市教育委員会が行った周辺での調査の結果から、遺跡の存在の可能性が低いことが予想されたので、2日間の予定で調査を行った。RI棟の西隣の空き地に試掘坑 (3m × 3m) を設定し、約1m重機で掘



図10 調査地区位置図 (縮尺1/50000)

削した後、南辺を幅70cm分のみさらに80cm人力で掘り下げる。中世以前の明らかな遺構・遺物は確認されなかった。図面作成の後、重機でさらに1m深掘りし、基盤の砂礫層の状態を観察して、調査を終了した。調査期間は1990年8月22日～23日である。



図11 調査地点図 (縮尺1/5000)

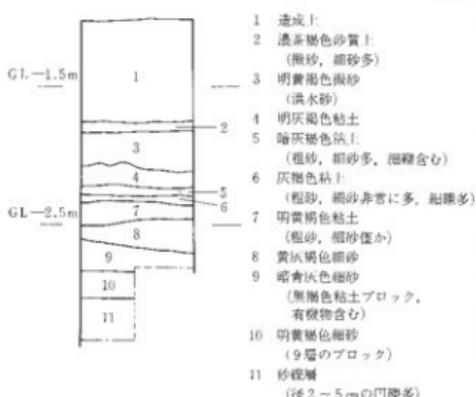


図12 土層断面図 (縮尺1/40)

### 調査結果 (図12)

1層は造成土である。2層は酸化鉄とマンガンの集積が僅かに認められ、造成直前の水田層と思われる。3層はしまりの悪い微砂層で洪水層の可能性が高い。4層、5層は3層堆積前の水田層と推測される。6層はしまりの悪い砂質土。7層はしまりの良い粘質土で水田層の可能性もある。6層と7層では中世後半以降と考えられる上器網片が出土している。8～10層は細砂層で層の境は漸移的である。9層は黒褐色粘質土のブロックと有機物を含んでおり、湿地に堆積したような状況を呈す。10層は9層のブロックが入り、湧水が激しい。11層は径数cmの凹凸を多く含んだ砂礫層である。各層とも遺構は全く検出され

かった。また、6、7層以外での遺物の出土はなかった。

### まとめ

調査地点は、江戸時代初期の干拓地のなかに位置するが、それ以前の小規模な開発や海岸線の変動によって遺跡が残された可能性もあり、試掘調査を実施した。しかし、干拓以前の明確な遺構、遺物は確認されなかった。

(上井)

## ⑤ アイソトープ総合センター予定地（鹿田地区 BY・BZ 68区）

### 調査の経過（図13、14）

アイソトープ総合センターは数年前から鹿田地区に設置することが計画されていた。その計画が具体化したことから、周知の遺跡内ではあるが、予定地の状況を確認するため（遺跡の有無も含めて）、試掘調査を実施することとなった。

建物予定地は、北側の基礎実験・講義棟、南側の附属動物実験施設に囲まれた駐車場の西半部に位置している。西側には塀を挟んで消防署が隣接し、大学敷地の西端部近くにあたる（図13）。

調査対象地区は本センターによる調査はこれまで及んでいないが、本センター設置以前、南側の附属動物実験施設建設の折りに、岡山市教育委員会によって断面観察によるデータがとられている（1981年）。これは、工事中の遺跡発見による緊急調査であったため、非常に不十分なものではあるが、鎌倉時代の遺構・遺物が確認されており、今回の建物予定地についてもその可能性は予想された。

試掘調査は予定建物のほぼ中央に約4×4mの試掘坑1箇所を設定して開始した。機械による造成土の除去中に、南および北側に旧建物基礎やガス管が出てきたため、調査範囲を中央部約1/3弱の部分に限定した。3層以下は手振りで調査を進め、5層上面で遺構の可能性のある凹みを検出・記録したのち、6層上面まで掘り下げた。その段階で調査面積をさらに東側1/2に絞り（図14）、7層上面まで掘り下げると同時に東・北側の側溝を深掘した。7層上面ではやや人形の遺構の可能性が認められたことから下層への掘り下げは不適当と判断し、また、側溝の断面観察から1981年の岡山市の資料と大差は無いと考え、この段階で記録をとり、調査を終了した。調査期間は1990年10月15～18日の4日間である。

### 概要（図15）

遺構は近世層上面で浅い落ち込みが確認されたほか、東壁断面で鎌倉時代に属する柱穴が明瞭に認められた（図15）。また、遺物は近世～中世、鎌倉時代までのものが出土しており、中世を中心

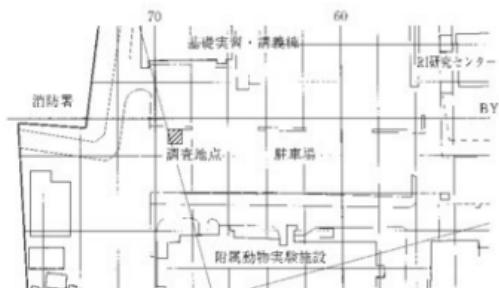


図13 調査地点図 (縮尺1/500)

とした集落の存在が予想された。本予定地は試掘調査後、約1ヵ月後に発掘調査に入り、1991年6月30日には調査を終了している。その概要是本年報の発掘調査の項(5~8頁)で前述しているため、試掘調査の詳細な概要説明は、それに含めることとし、ここでは省略したい。(山本)

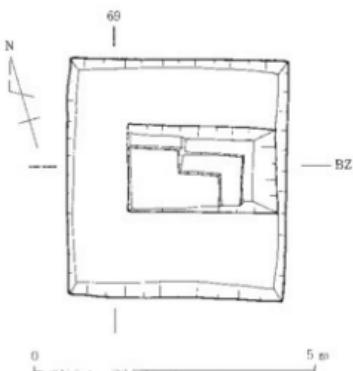


図14 調査区平面図 (縮尺1/100)

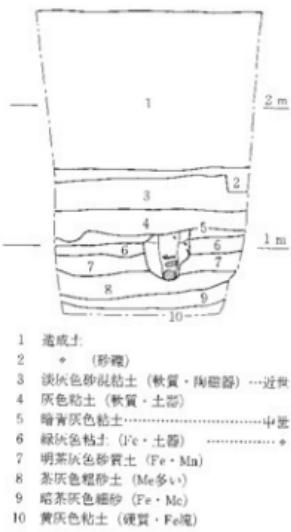


図15 東壁土層断面図 (縮尺1/40)

#### ⑥ 福利厚生施設新営予定地 (津島北地区 AW, AX 13区)

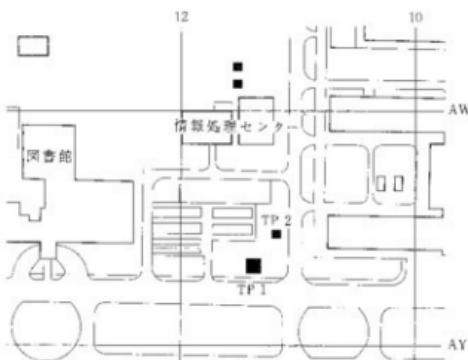


図16 調査地点図 (縮尺1/2400)

#### 調査の経過 (図16)

福利厚生施設建設設計画に伴い、予定地内の埋蔵文化財の確認のため、試掘調査を実施した。周辺のボーリング調査のデータから、現地表下約4mに砂礫層が予測されたので、予定調査深度を4mとし、10m×8mの大きさの試掘坑(TP 1)を設定した。しかし、試掘坑内の先行溝を掘り下げた結果、調査地点が

微高地に位置することがわかり、実際の調査面積を4m×4mに縮小し、標高1mまで調査した。また上層の観察から、北西方向に微高地が下がっていく傾向がみられたので、傾斜の程度をみるため、約8m北にもう1つ試掘坑（TP 2, 3m×3m）を設定した。先行溝の断面観察によると、むしろTP 2のほうが高かったので、それ以上掘り下げの必要なしと判断して、調査を終了した。調査期間は1990年10月29日～11月16日である。

#### 層序（図17）

現地表は標高4.4～4.6mを測る。1層は造成土で、2層はその直下の近代耕作土である。他地点との比較から、3～5層は近世、6層は中世と考えられる。7層は出土遺物から古代の耕作土と捉えている。9層は各地点で弥生時代前期ごろの水田が検出されている層で、8層はその上にのる砂層、10層はその下の粘質土層である。他地点の結果を参考にすると、11～16層は微高地を形成している層で、縄文時代後期ごろの堆積と推定されるが、遺物は全く出土しなかった。17層は土層の状況から遺構が存在する可能性があると思われたので、慎重に精査した

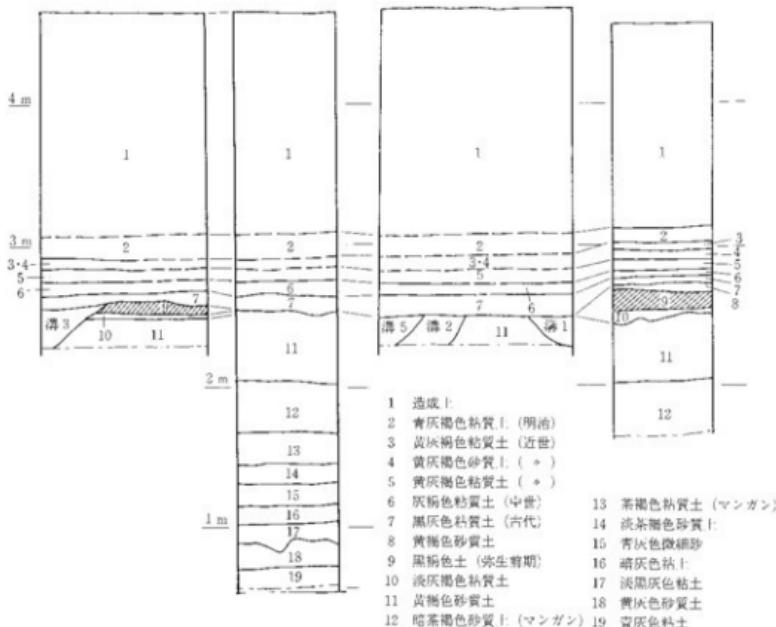


図17 土層断面柱状図 (縮尺1/40)

が遺構・遺物は確認されなかった。18層以下は基盤層になると考えている。

#### 遺構・遺物（写真7、図18）

TP 1, 9・11層上面で北西—南東方向の溝を5条検出した。溝1以外は断面観察による。溝3と溝4は同じ溝の可能性がある。遺物は出土しなかったが、他地点の溝の埋土と比較して、いずれも弥生時代から古墳時代にかけての溝と推測している。7層によってかなりの削平を受けていると思われる。その他の遺構は確認されなかった。



写真7 溝1検出状況 (西から)

遺物は、6層から中世土器片数点、7層から古墳時代—古代の土器片十数点が出土しているが、すべて細片で固化にたえうるものはなかった。

#### まとめ

今回の調査によって、予定地内の大半が微高地に位置することが確かめられた。

北接する情報処理センター新館予定地や図書館新館予定地の試掘結果の再検討と共に、この微高地がどこまで広がるか検討する必要がある。また、今回の調査では11層以下で遺物は出土しなかったが、発掘調査にあたっては、遺物包含層である可能性に十分留意して調査しなければならないだろう。（土井）

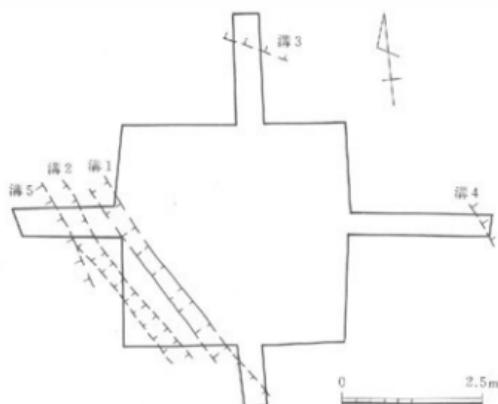


図18 遺構検出状況 (縮尺1/100)

#### 4 立会調査

##### (1) 津島地区 (表1, 図19)

1990年度の津島地区における立会調査は事業別にみると24件、詳細にみると40件に及ぶ。それらのほとんどは造成土内で終了するか、掘削深度の大きいものでも面積の狭いものであった。したがって、以下に報告する4件の立会調査を除いて特記すべきものはない。

報告する4件はすべて条里遺構に関係するものである。そのうち、古代に遡る可能性があるのは、岡山市市道拡幅補償工事関連電柱移設工事（表1-⑩）で確認した南北溝のみで、他の3件は、条里施行以後それを踏襲してきた、いわば、条里の名残りの溝を確認している。

調査⑩では電柱掘削機を用いて8ヶ所掘削したが、面積が狭く湧水が激しいために、立会調査にあたって上層の観察は困難であったが、東端の電柱で中世層の下に砂層を確認した（図19）。確認された位置が復元条里に一致しており、この砂層は条里南北溝埋土に似ているので、古代に遡るものと考えてよからう。

教養部グラウンドシャワー室新設に伴う排水管工事（表1-⑪）、総合大学院自然科学研究科棟外構工事（表1-⑫）、岡山市市道拡幅補償工事Ⅱ（表1-⑬）では南北方向の溝跡を確認している。調査⑪では、盛土の厚い部分が確認された。これは条里名残りの溝の裡であると考えられる。調査⑫では、近世層より、石垣に使用されたような石材が多く露出している部分があり、南北方向の溝の名残りであると考えられる。調査⑬ではほとんどの部分は造成土あるいは擾乱層内に収まっていたが、東端近くで陸軍用地時代の水路を埋めた跡を確認した。これも条里関連の溝の名残りであると考えられる。

以上のように今年度の立会調査は件数こそ多かったものの、小規模なものが多く、検出した遺構、遺物は少なかった。しかし、構内の条里遺構の復元にとって有意義な資料をかなり蓄積することができた。ただ、連絡の不徹底から、立会調査なしに工事を開始するなどの事態が少なからず起こった。今後は連絡を密にとって、そういう事態にならないようにしていく必要がある。

(窓野)

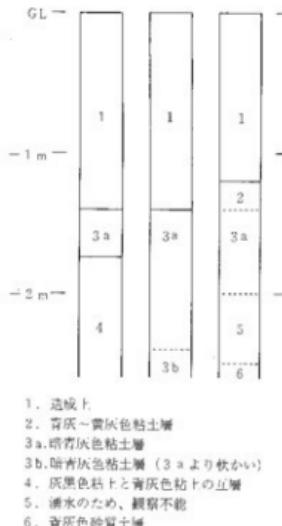


図19 調査10号層柱状図

(縮尺1/40)

(2) 鹿田地区（表1）

鹿田地区では事業別にみて3件の立会調査が実施された。そのうちRI給水管敷設替え工事（表1-34）では現地表下0.6~0.8mで明治時代水田層と考えられる青灰色粘土層の上面を検出したが、遺物は発見されなかった。その他の調査はいずれも深度が浅く、造成土内の掘削にてどまった。

（松木）

註

- 1 「岡山大学構内遺跡調査研究年報」 6 9頁 1988 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 2 「鹿田遺跡 I」 岡山大学構内遺跡調査報告 第3冊 1988 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 3 「岡山大学構内遺跡調査研究年報」 7 16頁 1988 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 4 「岡山大学構内遺跡調査研究年報」 5 30頁 1988 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 5 「岡山大学構内遺跡調査研究年報」 7 18頁 1990 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

表1 1990年度調査一覧

番号	種類	調査地区	所属	調査名 称	調査期間	掘削深度 (m)	備 考	
①	発掘	津島北 AV-AZ08	大自	人文学自然科学研究科様丸堀 ・松木橋	4.3~4.21	2.2~2.8	漢古西漢90cm、古墳時代後期溝 渠文化後期~中世土器片 (津島岡大5次調査)	
②	*	鹿 稲 BW-CC67~71	R I	アイソトープ総合センター (R I)	11.20~ 91.3.31	1.5~2.7	調査面積650m <sup>2</sup> 鍾乳石代溝・井戸・建物群 中世・鉄製工具、白磁・青銅鏡 (鹿田5次調査)	
③	試掘	津島南 BD02	学生	学生会宿所ボンセイ施設予定地	3.7~5.17	2.5	弥生時代前期柱群 中世土器片	
④	*	曾我地区	資生	資源生物科学研究所海南藻類調査	8.22~8.23	2.5	中世後半以降土器片	
⑤	*	鹿 田 BY-B258	R I	アイソトープ総合センター予定地	10.15~10.18	2.3	中世・土器質土器など (1990年度発掘調査)	
⑥	*	津島南 AW-AX03	学	福利厚生施設予定地	10.29~11.16	3.9	弥生・古墳時代の構 中世・土器小片	
⑦	立会	津島北 AZ-BM05	教育	エレベーター周辺排水管設置換	4.6~7	0.6~0.8	造成土内	
⑧	*	津島南 BB26	事	国際交流会館水銀灯設置	4.16	0.35	造成土内	
⑨	*	津島南 BC14~15	事	事務局周辺整備	4.20~21	0.3	造成土内	
⑩	*	BD04	教養	グラウンド シャワー室 新設	4.19~20	1.5	造成土0.9~1.0m。塗装名残?	
⑪	*	BC-BD05			電線埋設	4.20~25	1.2	造成土1.1~1.2m。~明治頃上面
⑫	*	津島北 AV10		岡山市道「町 津島東線軒 括縫工事に伴 う被覆工事」	高圧放電式取扱 電柱支張設	4.14	1.2	造成土1.2m。~明治頃上面
⑬	*	AV07			電柱移設	4.13~19	0.4~1.8	造成土0.5m。地下花崗岩盤
⑭	*	AV08~09			ブロック敷替	5.21~24	0.7	造成土内
⑮	*	AV09			電柱支綴	5.25	0.6	造成土内
⑯	*	AV04~06			電柱移設	5.28	2.5	造成土1.4m 東端で柔軟南北構?確認
⑰	*	AV06			N ハンドブレ T	5.29	2.0	造成土1.0m。用木筋埋土?
⑱	*	AV06~08			T 埋設装置	5.31~6.21	1.1	造成土0.6m。地下花崗岩
⑲	*	AV04~05			電柱移設	7.13	2.4~3.0	造成土1.1m 地表下2.0mより黒色土層
⑳	*	津島南 BD02-03~04 RD03~04			学生会宿所新 排水管設置	5.28~6.06 7.09~11	1.3	造成土1.2m 地表下2.3mより黒色土層
㉑	*	津島北 AV-AW04~05	I	工学部生物応用 I 学棟外構	5.10~6.06	1.3	~近世層上層。連結不能	
㉒	*	AV-AW05~06	I	工学部情報 I 学棟外構	6.06~14	1.3	造成土・既掘削内、造成小箇	
㉓	*	AV16	文法 科	合併処理槽排水管新設	6.26	0.8~1.5	造成土内	
㉔	*	AV11	I	機械 I 学科資料収納庫新設	7.10	0.1	造成土内	

## 1990年度岡山大学構内遺跡調査報告

番号	種類	調査地区	所属	調査名稱	調査期間	削除深度 (m)	備考
⑥	立会	津島北 AZ07	大曾 産合大学院自然科学研究科 複合構工事及び付設工事	底氣外導 酸性配線	7.04-05 8.06	1.1 0.8	造成土1.1m, -明治層上面 -明治層
⑦	*	* AY06-07					
⑧	*	* AY-AZ06-08		周辺整備	8.06-20 9.12	0.6	造成土内
⑨	*	* AY-AZ06-08		排水管設置	8.08-9.12	1.2	造成1.7m, -透水層 石灰石核(水路7), 透水不備
⑩	*	* AY06-07		ガス管設置	8.21-9.14	0.9	造成土内
⑪	*	* AZ06		排水管設置	8.07	2.5	造成土内, 施設内
⑫	*	* AZ06		ヘリウムガス 管設置	9.11	0.5	造成土内
⑬	*	* AW-BA12-16 津島南 BC-BE14-16	園 樹木移植等	周辺整備周辺整備開発 樹木移植等	11.13-14	0.5	造成土内
⑭	*	施口 BY-CS 60-80			11.15-16	1.2	造成土上0.7m
⑮	*	施口 BY-CS 60-80	園	R.I.給水管設置換え	11.15-16	0.6-0.8	-明治層上面
⑯	*	津島南 BD14-15	事	事務局周辺駐車場整備	11.28-29	0.2	造成土内
⑰	*	* BD14	事	事務局敷地内排水溝移設	12.3	0.3-1.5	造成土0.8m
⑱	*	津島北 AV01-03, AT03	岡山市道本町津島東駅前共軸幅 工事に伴う補修工事Ⅱ プロジェクト運行会	岡山市道本町津島東駅前共軸幅 工事に伴う補修工事Ⅱ プロジェクト運行会	12.4-10	0.7 -深1.5	造成土上0.7~0.8m -端端で渠化の名残?
⑲	*	* AX17	文法 経	焼却場新設	1.16	0.3	造成土内
⑳	*	* AV13	園	ボイラー室樓水洗管破損	1.18	0.6	造成土内, 緊急立会
㉑	*	施口 AX-BE33-52	園	記念会館及び管理棟周辺整備	1.21-2.28	0.5	造成土内
㉒	*	* AV09-10	工	工作センター配管	1.25	0.5	造成土内
㉓	*	津島南 BC-BD09	教委	歩道整備	1.28	0.2	造成土内
㉔	*	* BR-BC11	学生	先清金櫻貝郡駅周辺排水溝設置	2.1	0.25	造成土内, 透水不備
㉕	*	津島北 BA14-16	文法 経	南側雨水石積み改修	2.6-14	1.1	造成土内 隙間の土質カット
㉖	*	津島北 BE22	農	附属農場有機物施肥処理施設	2.13-14	0.2-0.9	造成土内
㉗	*	施田 AP-AY23-31	医病	外郭壁正面玄関前バリカーティン	2.14	0.5	造成土内
㉘	*	津島北 BA08	農	焼却炉新設	2.21	0.1	造成土内, 漏れ不備(房学部)
㉙	*	津島南 BF-BG13-14	農	駅事場施設	3.12	1-0.25	造成土内
㉚	*	* BI18-19	事	職員宿舎内松木丘構設置	3.19	0.5	造成土内
㉛	*	* DC-RD15	事	事務局沿直室はが改修及び蛇排水管設置	3.26	0.6-0.8	造成土内

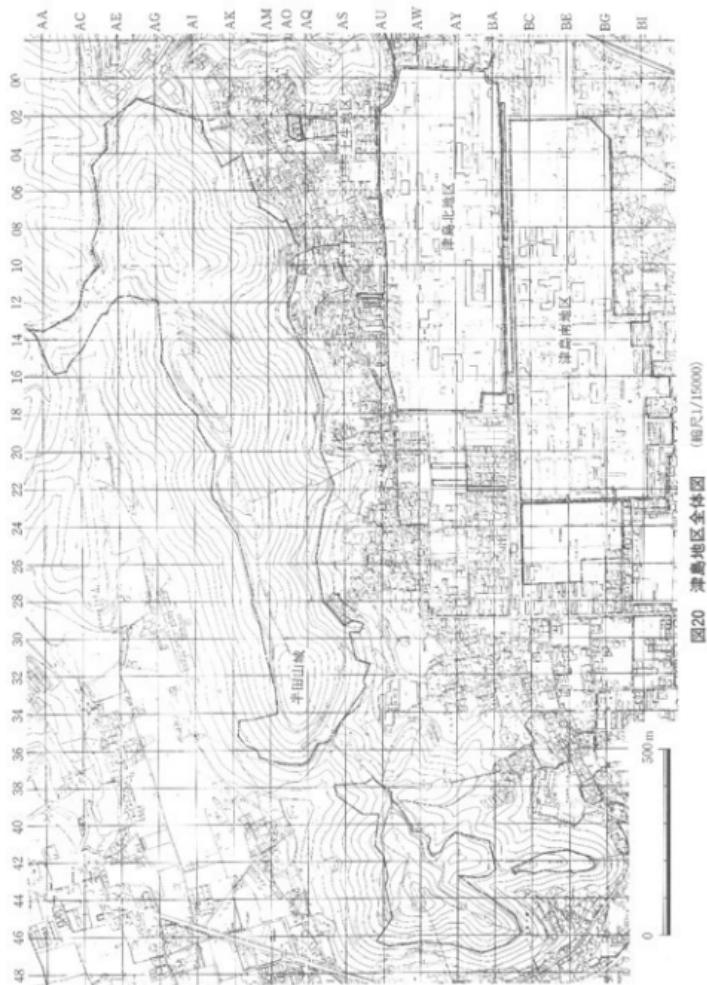


図20 津島地区全体図  
(縮尺1/15000)

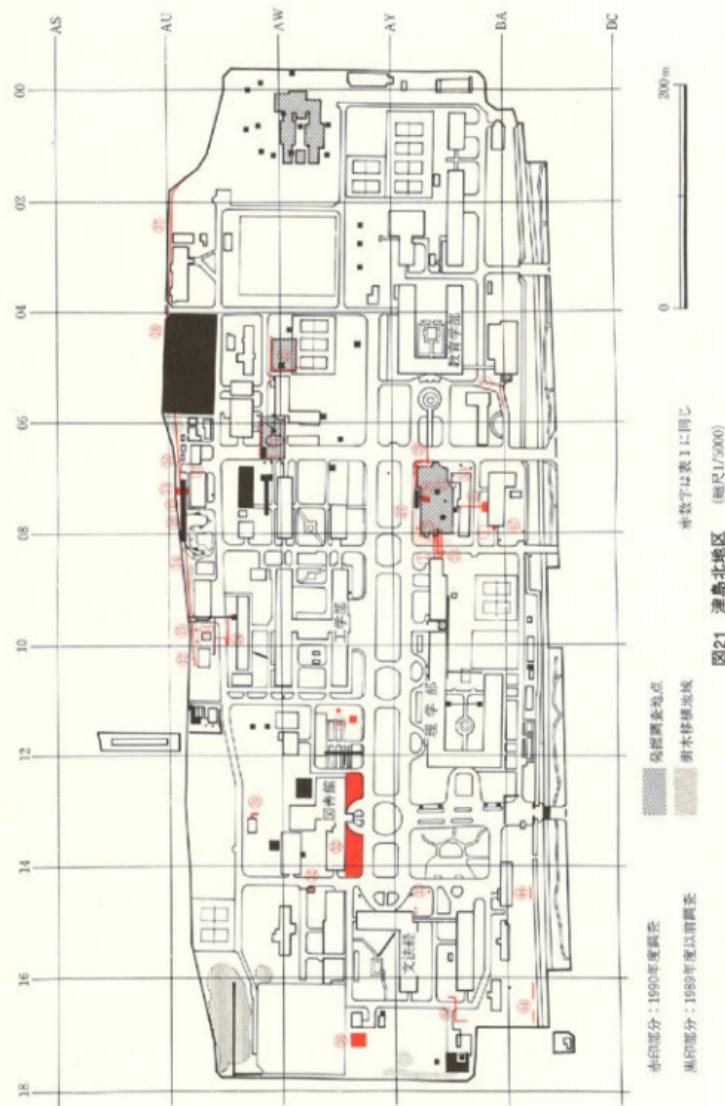
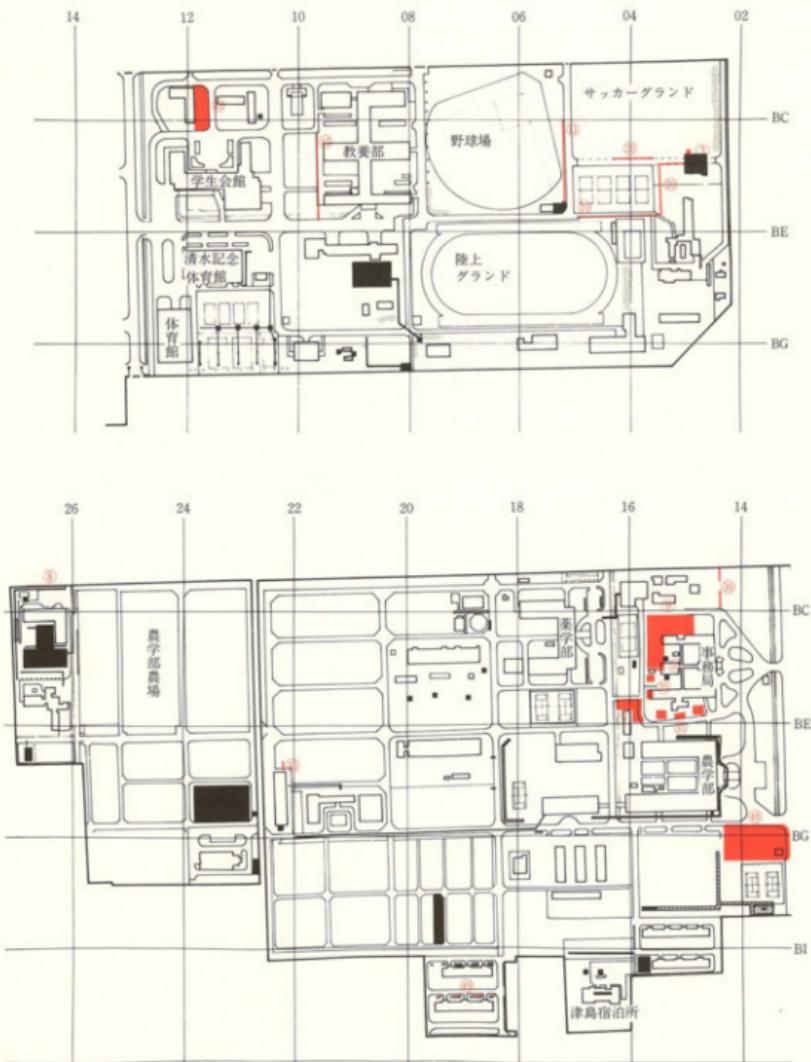


図21 津島北地区 (縮尺1/2000)  
水数字は表1に同じ



赤印部分：1990年度調査

発掘調査地点

赤数字は表1と同じ

黒印部分：1989年度以前調査

树木移植地域

0 200m  
（縮尺1/5000）

図22 津島南地区

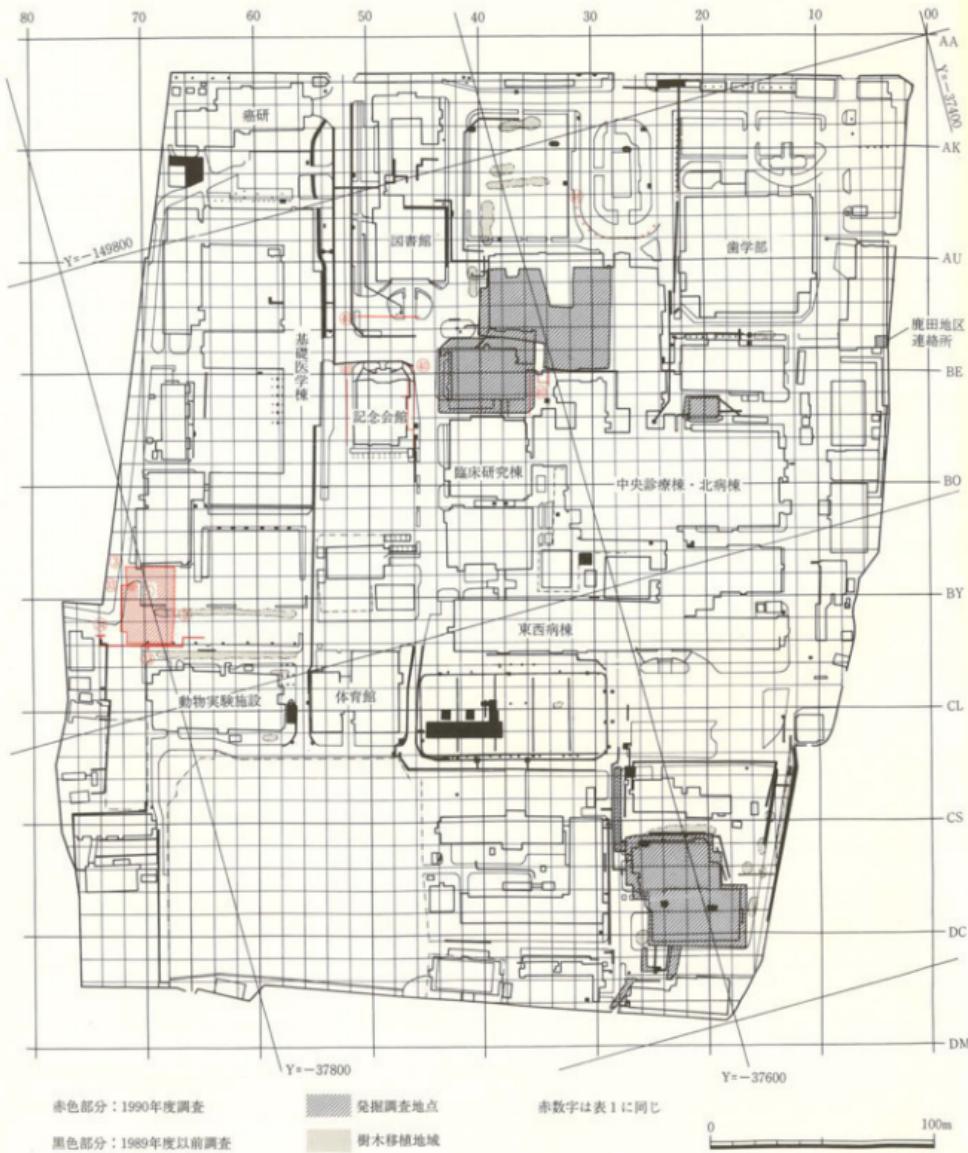


図23 鹿田地区全体図および調査地点 (縮尺1/2500)

## 第2章 1990年度普及・研究・資料整理活動

### 1 資料整理

本年度は次の6件の発掘調査の資料整理を行った。

- ① 津島岡大1次調査（学生部男子学生寮予定地）  
出土遺物の実測・トレース・写真撮影、遺構のトレース
- ② 鹿田5次調査（医学部附属病院管理棟）  
出土遺物の一部復元、出土種子類の採集
- ③ 津島岡大5次調査（大学院自然科学研究科棟）  
出土遺物の一部写真撮影、出土種子類の洗浄・採集
- ④ 津島岡大6次調査（工学部生物応用工学科棟）  
出土遺物の一部復元・実測、出土種子類の洗浄・採集
- ⑤ 津島岡大7次調査（工学部情報工学科棟）  
出土遺物の復元・実測・トレース、遺構のトレース

### 2 分析依頼

- ① 出土種子同定…大阪市立大学理学部教授 粉川昭平  
津島岡大遺跡（3次調査）：縄文時代晚期貯蔵穴内出土種子・縄文時代後期層出土種子  
古代河遺内出土種子
- ② 灰像分析・炭化物の同定…東京大学総合研究資料館 松谷暁子  
津島岡大遺跡（3・5次調査）：縄文時代後期貯蔵穴内出土土器内炭化物
- ③ 木製品樹種同定…農林水産省森林総合研究所 能城修一  
鹿田遺跡（1・2・5次調査）：弥生時代中期～中世の井戸・溝等出土木製品他  
津島岡大遺跡（4・6次調査）：古代溝出土杭群・縄文時代後期河遺出土自然木他  
タ  
（5次調査）：縄文時代後期貯蔵穴出土堅楠

### 3 刊行物

- |                          |                |
|--------------------------|----------------|
| ① 岡山大学構内遺跡調査研究年報7 1989年度 | 1990年11月20日 発行 |
| ② 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第4号 | 1989年7月 発行     |
| ③ タ<br>第5号               | 1990年3月 発行     |

\*なお、1990年度までの刊行物については附表3・4で一覧にして挙げている。

#### 4 調査員の活動

##### (1) 資料収集活動

山本悦世

〈木製品の科学的保存処理法について〉

元興寺文化財研究所

〈中世集落遺跡について〉

広島県立博物館

〈中近世土器を中心〉

福岡市博物館他

〈研究会参加〉

考古学研究会総会・中四国縄文研究会

中世上器研究会 他

松木武彦

〈古墳時代の武器・武具を中心〉

田布施町教育委員会

〈中近世土器を中心〉

福岡市博物館他

〈研究会参加〉

考古学研究会関西例会第49回例会

第29回埋蔵文化財研究集会

日本考古学協会大会 他

土井基司 科学研究費 奨励研究(A)交付

〈木製品の科学的保存処理法について〉<研究会参加>

元興寺文化財研究所

考古学研究会総会、九州・益山研究会

〈中予地方の横穴式石室について〉

中四国縄文研究会、日本考古学協会大会

松山市立埋蔵文化財センター他

中世土器研究会、九州史学会

〈中世集落遺跡について〉

古墳文化研究会 他

広島県立博物館

〈中近世土器を中心〉

福岡市博物館他

##### (2) 資料報告他

土井基司 「半田山城測量後記」『岡山大学構内遺跡調査研究年報 7』1990

松木武彦 「前期古墳副葬品の成立と展開」『考古学研究』148号 1991

##### (3) 研究発表

山本悦世 中四国縄文研究会 「岡山大学構内遺跡出土の縄文土器」

## 5 日記抄

1990年		
4月 2日	総合大学院自然科学研究科棟共同講・検査会場調査打ち合せ	・展示会について 他
4月 3~21日	＊ 調査 (担当:若林)	10月 15~18日 RI試験調査開始 (担当:山本)
4月 4日	第1回月例会議	10月 22日 RI発掘調査打ち合せ
	・今年度活動計画案 ・各調査報告	10月 29日 福利厚生施設試験調査 (担当:土井)
	・半山山城測量結果報告 他	～11月 16日
5月 1日	学生合宿所ゴンブ標発掘調査打ち合せ	11月 1日 松木、文部省部助手として赴任
5月 2日	第2回月例会議	11月 1~ 2日 展示品搬出、会場準備
	・各調査報告 他	11月 3~ 4日 展示会開催
5月 7~16日	学生合宿所ゴンブ標発掘調査 (担当:川田)	11月 5~ 6日 展示品搬入、片付け
6月 6日	第3回月例会議	11月 7日 第8回月例会議
	・調査報告 ・展示会について 他	・各調査報告 ・展示会について 他
6月 11日	運営委員会開催	11月 8日 RI発掘・福利厚生施設試験調査打ち合せ
6月 22日	収蔵庫増築・展示室完成パーティー	11月 9日 大懐かおり退職
6月 27日	管理委員会開催	11月 10日 RI発掘調査打ち合せ
6月 29日	展示会打ち合せ	11月 20日 RI発掘調査開始 (担当:松木, 山本, 土井)
7月 12日	第4回月例会議	午報 7 発行
	・人事について ・運営委員会、管理委員会報告 他	12月 5日 第9回月例会議
7月 16日	岡山大学博物館学実習開始	・各調査報告 ・木器処理施設について
7月 20日	センター報第4号入稿	・展示会のまとめ 他
7月 31日	若林退職、細川真助 (考古学研究室へ) センター報第4号発行	12月 17日 木器処理施設打ち合せ
8月 1日	第5回月例会議	12月 28日 御用筋め
	・展示会について 他	1990年
8月 22日	運営委員会開催	1月 4日 仕事始め
8月 22~23日	資源生物学研究所試験調査 (担当:土井)	1月 14日 第10回月例会議
		・調査報告 ・木器処理について
9月 5日	管理委員会開催	・予算等について 他
9月 7日	午報 7人稿	1月 22日 木器処理施設打ち合せ
9月 10日	岡山大学博物館実習終了	2月 6~ 8日 木器樹種鑑定サンプル採取 (能城)
9月 11日	第6回月例会議	2月 7日 運営委員会開催
	・調査報告 ・展示会について	2月 8日 第11回月例会議
	・管理委員会報告 他	・調査報告 ・木器処理施設について
9月 28日	アイソトープ総合センター (RI) ・福利厚生施設試験調査打ち合せ	・予算について ・運営委員会報告 他
10月 3日	第7回月例会議	2月 20日 管理委員会開催
	・調査会議について	3月 6日 第12回月例会議
		・調査報告 ・来年度活動計画
		・管理委員会報告 他
		3月 18日 センター報第5号入稿
		3月 28日 RI試験調査会員打ち合せ
		3月 31日 高齢センター長辞任
		センター報第5号発行

## 6 1989年度までの遺物収蔵量および保管施設

### (1) 货物收藏量 (表 2)

1991年3月31日における本センターの遺物収蔵量は、鹿田遺跡1・2次調査(医学部附属病院外来診療棟・NMR-CT室)：724箱、同3・4次調査(医療技術短期大学部校舎他)：134箱、同5次調査(医学部附属病院管理棟)：119箱、同6次調査(アイソトープ総合センター予定地)：30箱、津島両大2次調査(農学部合併処理槽・排水管)：18箱、同3次調査(学生部男子学生寮予定地)：48箱、同5次調査(大学院自然科学研究科棟)：89箱、同6次調査(工学部生物応用工学科棟)：63箱、同7次調査(同情報工学科棟)：13箱、その他の発掘及び試掘・立会調査(分布調査含む)：17箱、総計1255箱を数える。詳細は表2に挙げた。1箱の容量は約30Lを目安としている。また、木器の中で大型水槽に保管のものについては1箱に換算して計算している。

## (2) 管理・保管施設

本年度の本センターの使用施設としては、津島地区に管理施設（面積は100m<sup>2</sup>）と、収容施設（延面積は300m<sup>2</sup>：1・2階各150m<sup>2</sup>）がある。また、鹿田地区では連絡所として、旧混合病棟の東にある旧管理棟の二階の一室（約25m<sup>2</sup>）があり、ここには、原則として、職員1名が交代で常勤する形をとり、施田地区的立会調査等に対応した。

収蔵施設は、主として、1階を遺物等の洗浄・保管室ならびに器材置き場として、2階を常設展示室（約18m<sup>2</sup>）・写真撮影室（約10m<sup>2</sup>）・遺物整理室（約117m<sup>2</sup>）として使用している。

今年度は昨年度と同じ施設で変化はなかったが、使用面積は、管理施設100m<sup>2</sup>、収蔵施設300m<sup>2</sup>、鷹田地区で約25m<sup>2</sup>、合計425m<sup>2</sup>であった。(土井)

表2 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要

所属	種類	地 区 調査名 称	施 設 (1箱: 約30ℓ)				種 名	
			施設	土器	石器	木器	その他の サンプル	主要時期・特殊遺物
医病	発掘	鹿田1次調査 (外水浴療法)	608	491	6	60	1 ガラス 鉄 銅	弥生中期～中・近世 蛇甲狀・鶴伏木器等
タ	*	鹿田2次調査 (NMR CT室)	116	90	3	20		3 弥生後期～中世 田舟・木簡等
医病	*	鹿田3次調査(校舎)	131	36		90		5 古代～中世
*	*	鹿田4次調査(配軒)	3	2				1 古代・旗角製品
医病	*	鹿田5次調査 (管理棟)	119	79	1	20		19 弥生後期～中・近世
R I	*	鹿田6次調査 (アイントープ総合 センター)	30	29.5	0.5			中世・書道製品
農	*	津島園大2次調査 台原処理館 排水管	18		7	1		4 織文晚期～弥生前期
学生	*	津島園大3次調査 (男子学生寮)	48	30	6	2		10 織文後期～弥生・古代～近世 右脇指輪・蛇頭状玉器片

所属	種類	地 区	箱 数 (1箱: 約30 t)					備 考	文 獻
			総数	土器	石器	木器	その他		
学生	発掘	津島南大4次調査 (屋内遺跡調査)	1	1				縄文後期～弥生前期 (試掘調査遺物を含む)	⑥
大白	*	津島南大5次調査 (自然科学研究科棟)	89	55	2			32	縄文後期～弥生、古代～近世 耳挖・木製櫛(編文)
工	*	津島南大6次調査 (生物応用工学科棟)	63	30	1	22		10	縄文後期～近世 人形木器、アンペラ
*	*	津島南大7次調査 (情報工学科棟)	13	7	1			5	縄文後期～近世
医病	試掘	鹿 稲 犬山城	1	1				弥生～中世	⑤
学生 教育	*	津島北 男子学生寮 研究棟	1	0.7	0.3			縄文後期～弥生前期	々
大白	*	自然科学研究科棟	1	1				縄文後期～弥生前期	々
事	*	津 島 外国人宿舎 (土生)	1	1				縄文～中世	④
理	*	津島北 身障者用エ レベーター	0.3	0.3				中・近世	々
教養	*	津島南 々	0.7	0.7				縄文～中世	々
工	*	津島北 校舎	1	1				々～近世	⑪
農業	*	津島南 遺物・遺伝 子実験施設	0.7	0.7				縄文～弥生、中・近世	々
事	*	図書文庫会館	0.3	0.3				中世	々
大白	*	津島北 合宿處西棟	0.2	0.2				中・近世	⑩
学生	*	津島南 学生合宿所	0.5	0.2			0.3	中世	々
教育	*	津島北 身障者用エ レベーター	0.3	0.3				縄文	々
国	*	図書館	0.8	0.8				古墳～中世	々
学生	*	津島南 学生合宿所 ボンシブ棟	0.4	0.4				縄文～中世	⑫
資生	*	合 敷 資源生物学 学研究所	0.1	0.1				近世	々
R I	*	試 稲 アイソトーネ 総合センター	1	1				中世～近世	々
事	*	津島北 落羽原施設	0.4	0.4				弥生～中世	々
全学	立会	'83年度	2	2				分類形十製品	⑪
*	*	'84年度	1	1					⑫
*	*	'85年度	1	1					⑬
*	*	'86年度	0.5	0.5					⑭
*	*	'87年度	0.5	0.5					⑮
*	分布	'89年度 三朝・本島	0.3	0.3					⑯
総 箱 数			1255	878.9	21.8	214	1	139.3	

※文献番号は附表3、4に対応する。文献記述は本年報8を指す。

## 7 展示会

今年度は、構内遺跡の発掘調査の成果を紹介する第2回目の展示会を鹿田地区で行った。昨年度、津島地区で行った第1回目の展示会が、非常に好評であったことや、鹿田地区が著名な鹿田遺跡に当たり、最初の発掘調査から、豊富な内容をもつ多くの遺構・遺物が出土していることから、現地での展示会開催を求める声が強くなった。そこで、1990年度は前半期に発掘調査の予定がなかったことから、11月3～4日の鹿田祭に合わせて「第2回岡山大学キャンパス発掘成果展」を行うこととなった。

当日は、休日に当たっており、職員の方の見学が少なかったのが残念であるが、総計174人の見学者があった。展示内容については、概略を以下に簡単に記す。

「第2回岡山大学キャンパス発掘成果展」 1990年11月3～4日(9:00～16:30)

岡山大学医学部基礎医学棟2F

【企画展】 「まつりー井戸・墓・祈りー」

祭祀的要素の強い遺物に注目し、特に井戸・墓などを中心に、時代を追ってその変化を考えた。

主な展示：構内遺跡の調査から出土した遺物を中心  
に、出土状況の写真パネルや復元模  
型を加えてより分かりやすい展示を目  
指した。その中で、鹿田遺跡に重点を  
置いたため、中心は弥生時代から鎌倉  
時代となった。



<墓> 弥生時代の壺棺と壺棺内出土の乳歯  
鎌倉時代の人骨と副葬品

<井戸> 弥生～鎌倉時代：各時期の井戸から  
出土した土器

弥生時代：桃核

古墳時代初頭：武器形木製品

短甲形木製品

井戸の復元模型

平安時代：墨書き土器・大形の井戸枠



展示会光景

## 平安時代末～鎌倉時代

：白磁碗・木製品

種子類（炭化米・瓢箪・瓜等）

井戸の復元模型と井戸の底から出土

した牛頭骨

&lt;その他&gt; 繩文時代：耳栓・リング・蛇頭部土器等

弥生時代：器台・分銅型土製品

平安時代：人形木製品・馬骨



## 【鹿田遺跡コーナー】

主な展示：発掘調査成果から鹿田遺跡の性格を特

徴づける遺物・写真を展示

製塙土器・土錘・ガラス滓



## ※ ビデオ上映

『まつりーのぞいてみた井戸の世界ー』

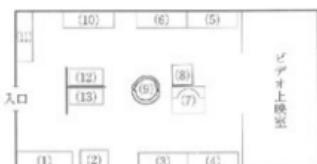
『弥生土器を作る』

『縄文・弥生の食生活】

展示会光景

今回の展示会も多くの方々の協力を得て開催することができた。ここで列記して深謝の意を表したい。岡山県古代吉備文化財センター（百間川遺跡群発掘調査現場の方々）、総社市教育委員会社会教育課、岡山大学医学部用度係、同事務局施設部、そして、中山沃先生をはじめ、同医学部生理学教室の方々、並びに小田嶋悟郎先生（同医学部）。この他にもたいへん多くの方々のお世話になった。残念ながら全てを挙げられないが深く感謝している。

(山本)



## 【縄コナー】

(1) 弥生時代の壹椎類

(2) 鎌倉時代の人骨

【井戸コナー】

(3) 弥生時代

(4) 古墳時代初期

(5) 平安時代

(6) 平安時代末～鎌倉時代

(7) 古墳時代初頭の井戸復元模型

(8) 鎌倉時代の井戸復元模型

(9) 平安時代の井戸骨

【その他コナー】

(10) 器台・分銅型土製品

(11) 縄文時代

(12) 縄文時代

【鹿田コナー】 (13) 【センターの仕事】

図24 展示会場見取り図

### 第3章 1990年度埋蔵文化財調査研究センター活動のまとめ

本年度は、調査研究員の減少によって、かなり厳しい1年であった。

そうした中ではあったが、第2回展示会を鹿田地区で開催することができた。前回同様、学内外の多くの機関、個人にお世話になった。ここで改めて感謝したい。また、センター報も年2回発行が定着した。しかし、立会調査の連絡不徹底など、埋蔵文化財に対する理解はまだ十分とは言えない。今後、一層努力して啓蒙広報活動に取り組んでいかなければならないだろう。

発掘調査は、大学院自然科学研究科標本体部分調査に隣接する共同溝・検水槽部分を調査し、本体部分で確認された微高地の広がりが予想外に小さいことがわかった。ついで、以前の試掘調査で低地部と予想されていた情報処理センター予定地が、福利厚生施設予定地の試掘調査によって、南から続く微高地に位置する可能性が高いこともわかった。津島地区構内の微地形がかなり複雑であり、調査の進展によって、常に認識を改めていく必要を強く感じた。また、アイソトープ総合センターの調査では、鹿田遺跡の中世における周縁地区の状況をつかむ良好な資料を得ることができた。今後の調査の進展によって、さらに多くの成果があがることを期待している。一方、分布調査は今年度中断されたものの、今まで調査の及んでいない倉敷地区で試掘調査を実施し、鹿田、津島両地区以外の構内の状況を知る資料がえられた。

自然科学的分析では、能城氏に、鹿田遺跡と津島岡人遺跡出土の全木製品を樹種鑑定して頂いた。津島岡大遺跡については、来年度刊行予定の『津島岡大遺跡3』(男子学生寮)の中で発表される予定である。また、出土種子、木製品については、半田山特別研究において、津島岡大遺跡の今までの成果をまとめた。さらに、鹿田遺跡の井戸出土種子を中心に、その意義について附録でまとめている。永年の懸案だった木器処理についても、木器処理施設が来年度設置されることが決定され、外注分については、事務局との話し合いで、来年度優先的に取り組むことが確認された。本年度は自然科学的分野が大きく前進した年といえよう。

今年度は少人数ながらも、木器処理をはじめとする、いくつかの懸案を解決することができた。少しずつではあるが、調査研究活動での成果もあがってきていている。しかし、新たな課題もしてきた。上述のように、調査の進展によって認識が刻々と変化しているのが実態であり、かなり以前の試掘調査時の認識とは異なっていることが多い。しかし、工事予定が未定のまま試掘調査を行い、既に数年以上経過した例もいくつかある。これは今後、大きな問題に発展していくかも知れない。大学全体の将来計画にも影響を与える問題であり、慎重に対処していく必要がある。ともあれ、来年度も今年度同様に苦しい運営が予想されるが、各人が奮起して努力していかなければならぬだろう。

(土井)

## 附表

附表1 1982年度以前の構内主要調査(1980~1982年度)

年度	調査地区名	種類	所属	調査名称	調査範囲	調査面積(m²)	文献	備考
1980	農田	立会	歯科	同財施設新設	岡山市教育委員会	8.0		
1981	津島南 BD 26	*	農	寄宿舎新設	*			
	津島北	*	文法	合併処理槽設置	*			
	津島南 BD 09 BC 09~11	*		基幹整備(共同溝敷付)	*			
	津島南 BD ~ BE 04~07	*		陸上競技場改修 (配水管埋設)	*			
	農田	*	医療	高気圧治療室新設	*			
	*	*		動物実験施設新設	岡山県教育委員会			試験調査をせざる既存 残存壁面等の調査
	*	*		病院新創部臓器移植保育 室新設	岡山市教育委員会			
	*	*	医	運動場改修	*			
1982	津島 AV 06~10 AW 06~14 AX 08~BD 07 BE 10	試掘		排水基幹整備	*			津島 AV 11区で出生時代包含層を確認。鑿痕
	小橋法日黒 津島北 AW 14	発掘	法文	排水管敷設(NP-1)埋設	岡山大学	24.0	③	(津島岡大1次調査)
	津島南	試掘	学生	武道館新設	岡山市教育委員会	2.3		
	津島北 AY 15~16	*	法文	校舎新設	*	7.0		
	農田	*	医療	標準保育室新設	岡山県教育委員会	8.0		
	*	*	医療	外来診療棟新設	岡山県教育委員会	4.0	2	
	*	立会	医	動物実験施設溝渠排水 管・ガス管埋設	岡山県教育委員会	1		
	農田 AE ~ AN 22 AE 22~26	*	歯	電気ケーブル埋設	岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室			

文献1 光永真一「岡山大学医学部附属病院動物実験施設新設工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 1983 岡山県教育委員会

2 河本 清「岡山大学医学部附属病院外來診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 1983 岡山県教育委員会

③ 番号は説明3の番号に対応する。

附表2 1989年度以前の構内主要調査(1983~1989年度)

## 附表2-(1) 発掘調査

年度	調査地区名	所属	調査名称	期間	面積(m²)	備考	文献
1983	農田 AU~BD 28~40	医療	外來診療棟新設	7.27~11.22 '84.1.9~3.31	2188	出生時代中期後半~中・近世集落址 (農田1次調査)	①
	* BG~BD 18~21	*	NMR-CT室新設	8.1~12.30	176	出生時代後期~中世集落址 (農田2次調査)	*

## 附表

年度	調査地区名	所属	調査名称	期間	面積(㎡)	備考	文献
1983	津島北 BE14~15 BF17~18, BG14 BU14~15	農	排水管理設	'81.1.9~3.5	365	縄文時代後期~弥生時代前期集落址 (津島岡大2次調査)	④
	BU13	*	合併処理施設	'81.1.9~3.5 '81.3~3.5	276	*	*
1984	鹿田 AU~BD28~40	医病	外来診療新宮	4.1~8.31	2188	弥生時代中期後半~中・近世集落址 (鹿田1)	⑦
1986	CY~CU27~28 CT~CY19~27 CX~DD16~25 DD~DG22~23	測量	校舎新宮	6.2~11.29	2390	古代~中世の集落址 (鹿田3次調査)	⑩
	津島北 AV00, AW00~04	学生	男子学生寮新宮	12.1~'87.3.31	1550	古代~近代の水田址 (津島岡大3次調査)	④
	津島北 BF~DG09	*	屋内運動場新宮	'87.1.19~1.22	70	弥生時代前開溝、中世河岸検出 (津島岡大4次調査)	*
1987	津島北 AV00 AW00~04	*	男子学生寮新宮	4.1~6.18 8.24~9.5	1550 80	縄文後期~弥生の集落址 縄文後期~晚期の河道。(津3)	⑧
	鹿田 BH~BR35~42	医病	管理棟新宮	10.6~'88.3.2 '88.3.23~3.31	1192	弥生中期後半~中・近世の集落址 (鹿田5次調査)	*
	DD~DF25 DG~DL27~28	医病	校舎周辺の配管	11.2~11.21	30	古代の河道 (鹿田4次調査)	*
1988	津島北 AY05~08 AZ06~07	大	自然科学研究科棟	6.27~'89.3.19	1537	縄文後・椎の野遺跡と河道 弥生~近世の溝と水田址 (津島岡大6次調査)	⑪
	AV~AW04~05	工	生物応用工学科棟	9.20~'89.3.31	600	縄文後・晚期の貯藏穴と河道 弥生~近世の溝と水田址 (津島岡大6次調査)	*
	AV~AW05~06	*	情報工学科校舎	10.12~ '89.3.31	800	縄文後・晚期集落址 弥生~近世水田址 (津島岡大7次調査)	*
1989	津島北 AV~AW04~05	E	生物応用工学科棟	4.1~5.31	600	縄文後・晚期の貯藏穴と河道 弥生~近世の溝と水田址。(津6)	⑫

附表2-(2) 試掘調査など

年度	調査地区名	所属	調査名称	探査深度(m)	備考	文献
1983	津島南 BH13	農	合併処理施設予定地	2.5	弥生時代初期土器片 (1983年度発掘調査)	①
*	BE~BG14 BF~BH15 BU18, BD16~18	*	排水管理設予定地	2	*	*
*	BF17	*	排水管中間ポンプ施設予定地	3.5		*
*	BF22~23	*	農場宿舎新宮予定地	2~3	土器片出土 造成土0.6m (1987年度工事立会)	*
*	BC~BD15	半	大学附属新宮予定地	*	土器片出土 *	0.9m
*	BH10	学生	保健管理センター新宮予定地	*	溝検出 *	0.8m
*	BH16	事	津島宿舎新宮予定地	2	土器片出土 *	0.9m (1987年度工事立会)
津島北 AW05	E	校舎新宮予定地	3	土器片出土 *	1.0m	*

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度 (m)	備考	文献
1981	鹿田 BL30-31	医病	西病院北面受水槽予定地	1.4	中世土器・包含層確認、 盛土保存	⑤
	・ CT-CU25 CT19-20-23-24	医病	長崎市立大学部 校舎新設予定地	2.7	中世・古代の遺物出土、 (1980年度発掘調査)	+
1985	津島南 DR08	教育	講義棟予定地	3.5	遺構・遺物未確認、 (1985年度工事立会)	⑥
	津島北 AX02	教育	研究棟予定地	2.6-3.4	繩文～弥生時代土器出土、造成土1.2m	+
	・ AV・AW99-01	学生	男子学生新宿予定地	2-3	繩文～中世の遺構・遺物、 (1986年度発掘調査)	+
1986	鹿田 AJ33,AJ40 AJ・AK26	医病	外来診療棟建設工事に先立 つ花園施設選定	2.2-3	弥生～中世の遺物、 0.9-1.4m	+
	津島南 BF・BG09	学生	室内運動場新設予定地	2.4 1.2-1.7	弥生前中期・中世河道検出、造成土1.1m (1986年度発掘調査)	④
1987	津島北 AY・AZ07	大	自然科學研究棟新設予定地	1.6-3.2	繩文中期～後期の遺構・遺物出土 造成土0.6-0.8m (1988年度発掘調査)	+
	土生 AP02	事	外国人由会建設予定地	2.2-2.8	近世・弥生・繩文の遺構跡確認	⑤
	津島北 AV11	情	情報処理センター新設予定地	2.0-3.0	黑色土を標高2.3m前後で確認、遺構は未検出 造成土2m	+
1988	・ AY09	理	身体障害者用エレベーター建設 予定地	3.0-3.5	近世・中世の遺物、中世・古代の水田址 造成土約1m (継続して発掘調査に及ぶ、小規模発掘)	+
	津島南 BD09	教養	・	2.5	繩文時代後期群跡確認 繩文・中世・近世土器出土、造成土0.7m (継続して発掘調査に及ぶ、小規模発掘)	+
1988	津島北 AX04-06,AW04	工	校舎建設予定地	2.0-3.5	黒色土を標高3.3m付で確認 溝状遺構・水田址検出、繩文～近世土器出土 (1988年度発掘調査)	③
	津島南 BD18-19	農業	動物実験室施設 及び運搬子実験施設	2.3	黒色土を標高約2.3mで確認 溝状遺構・繩文～中世遺物出土 造成土1.1-1.2m	+
	・ BC29	事	国際交流会館	2.5	近世・中世の遺物出土、造成土約1.2m (1988年度工事立会)	+
1989	津島北 AZ17	大	合併処理槽設置予定地	4.0	中世・昭和の水田の耕跡・溝、造成土1.6-2m (1989年度工事立会)	④
	津島南 BD02	学	学生合宿所予定地	2.0-3.2	繩文時代～弥生前期の柱跡、造成土約1m (1989年度工事立会)	+
	・ AZ-BM05	教育	身体障害者用エレベーター	2.5	繩文時代後～統期の落込み 繩文時代後期～平底土器片、造成土0.8m (小規模発掘、面積58.5m)	+
	津島北 AV・AW13	医	医書館新設予定地	3.0	古代水田、弥生～古代の溝、造成土1.4-1.6m	+

附表 2-(3) 立会調査

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度 (m)	備考	文献
1983	東山	教育	附属中学校新設	4-5	シルト層中	①
	鹿田 AR・AS38,BC40	医病	外来診療棟及び泊耳鼻科標準機 保存状況確認調査	2.5-3		+

附表

年度	調査地区名	所轄	調査名	掘削深度 (m)	備考	文 章
1983	津島北 AX15	文	中庭水銀電池下ケーブル埋設	0.7	造成土中	①
	鹿田 AV23	医病	旧中央診療棟埋設管修繕	1	*	*
	* AM32	*	外來診療棟シールド取付に伴うアース盤埋設	2		*
	* DC39~42	*	ブール庭辺塀製作業	0.7	造成土中	*
	* AO~AW22	*	外來診療棟屋外配管埋設	1.3	衛生後閣土器(分派形土製品)、貝殻精	*
	津島南 BC~HF18	葉	庭辺排水用集中槽埋設 水道管埋設	2.5 1.5		*
	津島北 BA13	事	西門横梁改修	2.6		*
	鹿田 BH17~18	医病	混合桿北氣ガス管埋設	1	造成土中	*
1984	* BG~BH17~18	*	XMR-CT定期検査係水施設取付	0.6~1.5		②
	鹿田 BD~BH64	医	旧基礎医学棟小庭跡塗装修理	0.8		*
	津島北 AW~AX11 AZ~BA12~13	情	通信用管路埋設	0.7~1.4	造成土0.9~1.3m	*
	鹿田 AE36	医病	外來診療棟新開渠傍電柱架設	1.95	* 1.25m	*
	* EQ33	*	中診北病棟外カリバー室医療機器用取付	1.6	* 1.5m	*
	* BT21	*	別房棟東側埋設ガス管修繕	0.8	造成土中	*
	* DB29	*	看護婦宿舎前水道管修繕	2.0	中世包含層確認、中世・弥生式土器出土 造成±1.15m	*
	津島南 EH16	事	非常動線跡痕沿施設新設	1.6	* 1.0m	*
	* BI15	*	南宿舎合併處理槽間隔配水管埋設	2.0		*
	* BI15~17	*	南宿舎合併處理槽間隔配水管埋設	1.0~2.2	壘・土壤検出(瓦砾等)、弥生・土器出土 造成±1.0m	③
	鹿田 BA16~22	医病	外來診療探摸係ガス管引込み工事	1.2~1.4	ほとんど造成土	*
1985	* AW~BH23 BH~BI24	*	足外排水管埋設	1.3~1.7	造成土0.7~1.3m 中世・弥生の遺物、遺物確認	④
	* CR69	*	看護学校構内水道メーター取設	1.0	造成土中	*
	* AK~AM43~46 AO~AT42他	医	基幹環境整備給排水その他の工事	1.0	造成±0.8m、近世土器等出土	*
	* AU~AW40 BA40~42	医病	基幹環境整備化工事、外來診療棟西	1.1	* * 中世包含層確認	*
	* AG34~36 AL~AN34~39 AU~AS39	*	外來診療棟北	1.1	* * *	*
	* BA22他	*	基幹環境整備給排水その他の工事	1.15	造成±1.0m	*
	津島北 AV06~07	I.	三次元換算および排水管理設	1.5~1.7	* 1.0~1.5m、土器細片出土	*
1986	鹿田 CS~CT19~24 CM~CU12~13 CR14,CU~CW15 CW~CZ16,CH33	医病	樹木移植	0.8~1.5	* 1.0m	⑤

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度 (m)	備考	文献
1986	鹿児島 BE08-09	医療	排水・汚水管改修	0.8~1.3	※ 0.8m	⑥
	鹿児島 BE08-09	教育	校舎新設	2.3	※ 1.3m, 中・近世土器・溝検出	+
	鹿児島 BV10,CV29 DD29,CK27 CL-CW26-29	医療	* 設備	0.5~1.2	※ 0.8~0.9m	+
	津島北 AU04-16-17 AV15	文	樹木移植	1.0~1.6	造成土内	+
	AV16-17	*	グランド改修	3.5	造成土1.5m	+
	津島南 BG08	学生	ハンドボールコート新設	0.2~2.0	※ 0.8m, 黒色土確認	+
	津島北 AX16	文	動物実験施設新設	0.95	造成土内	+
	鹿児島 CL-CR12 CR-CX13 CX-DA14	医療	溝堀及び壁画工事	2.0	造成土0.8~1.0m, 中世包含層	+
	津島南 BF07-08	教育	校舎新設に伴う電気配管	1.8	造成土0.9m, 中世包含層	+
1987	鹿児島 BC37	医療	管理棟新設に伴う基礎杭確認	2.5	弥生時代包含層・遺構確認	⑥
	津島北 AY09	理	身体障害者用エレベーター設置 伴う汚水管改修	1.2 邦1.6	造成, 1m前後	+
	津島 AQ02-03	事	上牛宿塗壁排水管改修	0.7	※ 0.6m	+
	津島北 AW01	学生	瓦場糞給水管修理	2.0	※ 0.96m, 谷部分	+
	鹿児島 CW14-17	医療	校舎新設 配管	1.3	※ 1.16m, 中世水田層	+
	DC-DE23	*	*	1.9	※ 1.1m, 溝内	+
	CW16	*	*	1.2	※ *	+
	DF24 DG24-26	*	*	1.6 3.0	※ * ※ *	+
	DD-DE24 DF23-24	*	*	1.38 1.8	※ * ※ *, 中世層確認	+
	津島南 BF22-23	農	農場施設新設その他の工事	1.8	※ 1.23m	+
	BG22	*	*	3.6	※ 1.2m, 自然底路内	+
	BE17-21	*	*	0.7~1.5	※ *	+
	BR22	*	*	3.0	※ 1.3m	+
	鹿児島 BA17-21	医療	山田病院北駐輪場基礎	0.6	造成土内, 弥生土器出土	+
	CM-CV30~43 CC-CN45~47	*	道路排水整備	0.7~1.1	※ , 深度1.1m地点のみ造成土65cm	+
	CH-CI56-57	医	動物実験施設焼却炉樹脂剤	1.0~1.2	造成土0.8m	+
	CM13-26 CN-CQ14 CP-CI14 CO-CR26-27	*	*	0.3~1.0	※ *	+
1988	津島北 AY11-AZ11	情報	情報処理センター通信機付設	1.2	造成土0.8~0.85m	⑩

## 附表

年度	調査地区名	所轄	調査名稱	掘削深度 (m)	備考	文献
1988	施 田 AE41,AJ+AO43 AV40	西牧	管理棟新館に伴う電柱架設	1.6	造成土0.6m~1.4m	◎
	津島北 AZ06	大	大学院新宮に伴う電柱架設	2.3	造成土0.8m	△
	津島南 BF+BG10-11	牧養	チニスコート夜更照明施設	2.2 1.4~1.5	黒土色を表土下約2mで確認 西に向かう落ちる様で構造される 造成土1.5m	○
	+ BC26	半	国際交流会館 本体部分	1.0 2.4~2.9	+ 1.5m	△
	+ BR25-25	+	電柱架設	1.7~1.9	+ 1m, 以下は灰色粘土	△
	+ BD26	+	国際交流会館 合併処理槽	2.2	造成土1.3m	○
	施 田 AY47	医	玄関付近外灯設置	1.0~1.3	造成土内	△
	津島北 AK09+10	工	機械工具科・機器応用科学科 実験棟電気改修	1.4~1.6	造成土1.4m	○
1989	津島北 AZ09,RA+RB09	大自	自然科学研究科棟新宮 電柱架設	1.8~2.2	造成土約1.0m	◎
	+ AZ08	+	工事用道路	1.4	弘生後斯水用, 近世溝跡出	△
	+ AU04-05	工	生物応用工学科新宮 電柱架設	1.5~1.9	+ 0.7~1.2m	○
	+ AV06	+	情報工学科地下部分掘削	6.0	標高-0.5mまで配筋, 混凝物無	○
	津島南 BC02		市道並軸排水工事 学生寮新館	1.2	造成土1.2m	○
	+ AY17	大貿	合併処理槽 地質調査	2.3	造成土 2.0m	△
	+ +	+	本体部分掘削	3.0	(1989年度試掘調査)	△
	+ BD05	学生	体育附属施設新宮	1.4	搅乱内	○
	津島北 AX+AY14,RA16	文	樹木移植	1.5	△	△
	施 田 CO26-27	医前	田管理棟解体に伴う配管移設	0.4~1.3	-近代木田層内	△
	施 田 CE31~43 CH34~37 CM31~44	*	羽音理園跡地埋蔵物 桧木存遺	0.8~1.0	造成土内	○
	+ CF30-37-44 CI+CK45 CL28-29 CM35-42	*	外汀塗埋蔵窓	1.2~1.5 1.4	造成土0.7~1.0m 中世層確認 搅乱内	△

※ 発掘・試掘調査については全てを、立会調査については主要なもののみを対象としている。  
文献番号は附表3、4に対応する。

附表3 埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名 称	発行年月日
①	岡山大学構内遺跡調査研究年報1 1983年度	1985年2月28日
②	岡山大学構内遺跡調査研究年報2 1984年度	1985年3月30日
③	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集	1985年5月7日
④	岡山大学津島地区遺跡群の調査 (農学部構内BIII3区他) 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第2冊	1986年3月31日
⑤	岡山大学構内遺跡調査研究年報3 1985年度	1987年3月31日
⑥	岡山大学構内遺跡調査研究年報4 1986年度	1987年10月31日

附表4 埋蔵文化財調査研究センター刊行物

番号	名 称	発行年月日
⑦	施田遺跡I 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊	1988年3月31日
⑧	岡山大学構内遺跡調査研究年報5 1987年度	1988年10月31日
⑨	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第1号	1988年10月
⑩	施田遺跡II 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊	1990年3月31日
⑪	岡山大学構内遺跡調査研究年報6 1988年度	1989年10月14日
⑫	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第2号	1989年8月
⑬	タ 第3号	1990年2月
⑭	岡山大学構内遺跡調査研究年報7 1989年度	1990年11月20日
⑮	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第4号	1990年7月
⑯	タ 第5号	1991年3月

## 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

### 1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規定

#### (設 置)

第1条 岡山大学（以下「本学」という。）に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

#### (目 的)

第2条 センターは、本学の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護をはかることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成に関すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項

#### (センター長)

第3条 センターにはセンター長を置く。

- 1 センター長は、専門的知識を有する本学の教授の中から学長が命ずる。
- 2 センター長は、センターに関する業務を掌理する。
- 3 センター長は、センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

#### (調査研究室)

第4条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

- 1 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。
- 2 室長は、専門的知識を有する本学の教官の内から学長が命ずる。
- 3 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。
- 4 室長は、センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

#### (調査研究専門委員会)

第5条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

- 1 専門委員は、本学の教官の内から学長が命ずる。
- 2 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

#### (管理委員会)

第6条 本学に、センターの管理運営の基本方針を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）を置く。

- 1 管理委員会に関する規定は、別に定める。

#### (運営委員会)

第7条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

- 2 運営委員会に関する規定は、別に定める。

#### (事 務)

第8条 センターの事務は、施設部企画課において処理する。

#### (細 则)

第9条 この規定に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、学長が別に定める。

#### 附 則

- 1 この規定は、昭和62年11月26日から施行する。
- 2 この規定施行後最初に任命されるセンター長、室長及び専門委員の任期は、第3条第4項、第4条第5項及び第5条第3項の規定にかかわらず、昭和64年3月31日までとする。

○規定理由

岡山大学の敷地内の埋蔵文化財の発掘調査などの業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図るために、学内施設として、新たに岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを設置すること及びその組織等必要な事項について定めるため。

**2 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規定**

(趣旨)

第1条 この規定は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規定（昭和62年岡山大学規定第48号）第6条 第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）に關し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 管理委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針その他重要な事項を審議する。

(組織)

第3条 管理委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 学長
- 二 各学部及び教養部長
- 三 自然科学研究所長
- 四 資源生物研究所長
- 五 附属図書館長
- 六 各附属病院長
- 七 地球内部研究センター長
- 八 学生部長
- 九 医療技術短期大学部主事
- 十 事務局長
- 十一 埋蔵文化財調査研究センター長

(委員長)

第4条 管理委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

2 委員長は、管理委員会を召集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を認め、その意見を聞くことができる。

(幹事)

第6条 管理委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

(庶務)

第7条 管理委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

附 則

この規定は、昭和62年11月26日から施行する。

○規定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針等を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会に關し、必要な事項を定めるため。

**3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規定**

(趣旨)

第1条 この規定は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規定（昭和62年岡山大学規定第48号）第7条 第2項に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に關し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関

## 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

する具体的な事項を審議する。

### (組 織)

第3条 運営委員会は、次の号に掲げる委員で組織する。

一 理藏文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二 本学の教授のうちから学長が命じた者若干名

三 センターの調査研究専門委員から学長が命じた者1人

四 センターの調査研究室長

五 施設部長

2 前項第2号の任期は、1年とし、再任を妨げない。

### (委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を召集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

### (委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

### (庶 務)

第6条 運営委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

### 附 則

1 この規定は、昭和62年11月26日から施行する。

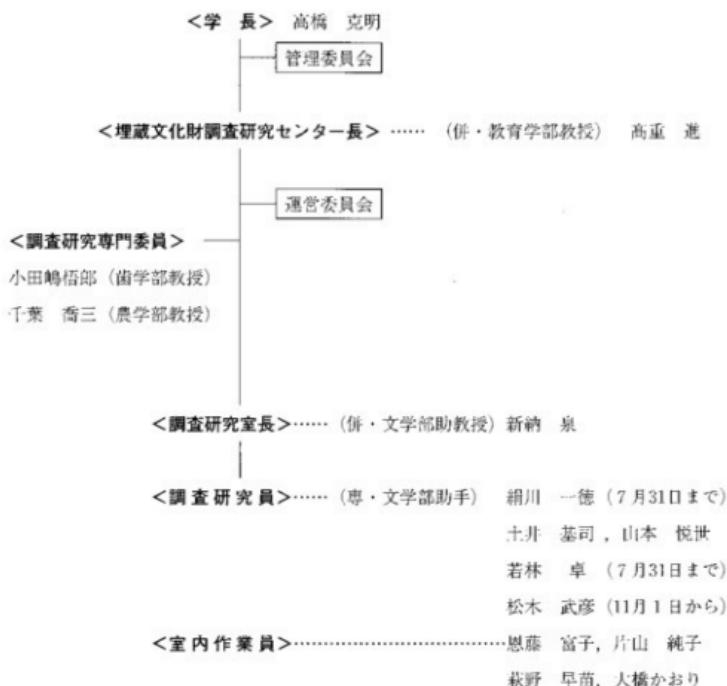
2 この規定施行後最初に任命される第3条第1項第2号の委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、昭和64年3月31日までとする。

### ○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの運営に関する具体的な事項を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会に関し、必要な事項を定めるため。

## 1990年度埋蔵文化財調査研究センター組織

## 1 センター組織一覧



## 2 管理委員会

## 委員

学長	高橋 克明	教養部長	脇本 和昌
文学部長	好並 隆司	自然科学研究科長	本田 和男
教育学部長	松浦 政義	資源生物研究所長	河崎 利夫
法学部長	藤井 俊雄	附属図書館長	定兼 篤明
経済学部長	橋本 博之	医学部附属病院長	大月 三郎
理学部長	萬成 黙	歯学部附属病院長	山下 敏
医学部長	小坂二度見	地球内部研究センター長	秋本 俊一

歯学部長	足立 明	学生部長	坂田 錦
薬学部長	田坂 賢二	医療技術短期大学部主事	喜多嶋康一
工学部長	河野伊一郎	事務局長	馬上 真平
農学部長	中村怜之輔	埋蔵文化財調査研究センター長	高重 進
幹 事			
庶務部長	石川 秀夫	経理部長	大久保輝男
施設部長	渋谷 政利		

#### 審議事項

- 1990年 6月27日 1989年度埋蔵文化財調査研究センター決算について  
埋蔵文化財調査研究センター運営委員会委員について  
1989年度事業について  
埋蔵文化財調査研究センター倉庫増築について  
1990年度埋蔵文化財調査研究センター予算について  
1990年度事業計画について

### 3 運営委員会

#### 委 員

教育学部教授	高重 進（センター長）	教養部教授	定兼 範明
文学部教授	種田 孝司（9月1日から）	歯学部教授	小山嶋悟郎（調査研究専門委員）
工学部教授	本田 和男（管理委員会委員）	文学部助教授	新納 泉（調査研究室長）
医学部教授	中山 沢	施設部長	渋谷 政利

#### 審議事項

- 1990年 6月11日 1989年度埋蔵文化財調査研究センター決算について  
1990年度埋蔵文化財調査研究センター予算について  
調査研究員の退職等について  
1990年 8月22日 調査研究員の新規採用について  
運営委員の新規任命について  
展示会（案）について  
1991年 2月7日 1990年度活動報告  
1991年度事業計画（案）について

## 附編

## 岡大構内遺跡出土の自然遺物について

## —井戸出土の種子を中心にして—

山本 悅世

## (1) はじめに

1983年に岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの前身である埋蔵文化財調査室が設置されて以来、発掘調査によって多くの遺構・遺物が出土している。それらは、隨時、発掘調査報告書として報告されてきている。しかし、報告書の中心となるのは検出遺構、あるいは上器・石器

表1 種子一覧表

番号	種子									開拓地点	遺構番号 (発掘地)	時期		
	モモ	ウリ	ヒュウタン	トチ	クルミ	カシ	センダン	コメ	ムギ					
1	○	○	○	○	○					錦草・貝	鹿田1次	井戸1	弥生後半	
2	○			○	○					イヌガヤ	鹿田1次	井戸2	弥生後期前半	
3	○				○						鹿田2次	井戸1	弥生後期前半	
4	○										鹿田1次	井戸6	弥生後期後半	
5	○										鹿田1次	井戸7	弥生後期後半	
6	○										鹿田1次	井戸8	弥生後期後半	
7	○										鹿田1次	井戸10	弥生後期後半	
8				○	○						鹿田1次	井戸12	弥生後期	
9	○	○		○	○						鹿田1次	井戸13	古墳初頭	
10	○	○		○	○						鹿田1次	井戸14	古墳初期	
11	○	○	○								鹿田1次	井戸15	古墳初頭	
12											鹿田1次	井戸17	古墳中期	
13	○	○	○			○	○			貝	鹿田1次	井戸20	平安(9c)	
14	○		○								鹿田2次	井戸4	平安(9c)	
15	○										鹿田5次	井戸(3)	平安	
16		○									貝	鹿田1次	井戸21	平安末(11c後半)
17												井戸22		平安末(12c初頭)
18												井戸23		平安末(12c)
19	○										貝	鹿田1次	井戸26	平安末(12c)
20		○										井戸27		平安末(12c)
21	○											井戸28		穀倉(13c前半)
22	○											井戸30		穀倉(13c前半)
23		○										井戸5		穀倉(13c前半)
24												井戸6		穀倉(13c後半)
25												井戸7		平安末
26	○	○	○	○								井戸2		穀倉
27	○											井戸(4)		穀倉
28	○													
29	○													
30	○													

1:錦草メロン・マクワウリ 2:ザクロ草・イヌビユ・シソ科・カラムシ・タカサゴブロウ 3:マクワウリ

4:オナモミ 5:マクワウリ・キカラスウリ 6:コギシギシ

などの遺物であり、自然遺物の多くは、本文中に記載される程度で総括的に取り上げて報告してきたとは言い難い。ここでは、同大構内遺跡で出土している種子・骨・貝などの自然遺物の中で、分析に耐えうる数の出土例があり、一定の検出レベルが保証されているものについて、現在、種目の同定が終了しているものを基礎に、時期的変遷を考えながら出土状況を検討し、いくつかの問題点・意義を考えてみたい。具体的には、種子では雑草類を除く大型の種子に限定し、そのほかには獸骨を対象とする。貝については資料数が少ないため、データを挙げるにとどめる。木製品についても、樹種の問題をとりあげて、近年中に総括的報告が為される予定であるため、略すこととする。また、自然遺物が出土する遺構として、井戸・溝・河道・土器溜り・貯藏穴等が挙げられるが、土器溜りについてはその例が構内遺跡で少ないとことから、井戸・溝・河道に限定する。取り上げる時期は、構内遺跡で確認されている弥生時代～古墳時代初頭・平安時代・平安末～鎌倉時代の四時期である。ここでは便宜的に各々をI～IV期として扱うこととする。また、種類の同定が終了した構内出土の種子・獸骨・貝の一覧を表1～3に挙げておく。

表2 獣骨一覧表

番号	種					調査地点	遺構番号 (発掘時番号)	時期
	ウマ	ウシ	シカ	イノシシ	イヌ			
1	○					鹿田1次調査	井戸22	平安末(12c初頭)
2	○					鹿田3次調査	河道	平安(9c)
3	○		○		○	鹿田4次調査	河道	平安(9c)
4		○		○		鹿田5次調査	井戸(2)	鎌倉
5			○	○		鹿田5次調査	井戸(7)	平安末
6			○			津島3次調査	包含層	鎌文
7	○					津島6次調査	河道	平安

表3 貝一覧表

番号	種	類	調査地点	遺構番号(発掘時番号)	時期
1	ヤマトシジミ・ハイガイ・ヘナタリ		鹿田1983年度立会	貝塚	弥生後期初頭
2	ヤマトシジミ・ハイガイ・ヘナタリ・マガキ		鹿田1次調査	土器溜り2	弥生後期末
3	シジミ		鹿田1次調査	井戸1	弥生中期後半
4	ヤマトシジミ・ハイガイ		鹿田2次調査	井戸3	弥生後期後半
5	シジミ		鹿田1次調査	井戸12	弥生後期末
6	ヤマトシジミ・ハイガイ・ヘナタリ・ハマグリ		鹿田1次調査	井戸20	平安(9c)
	ムラサキガイ・ゴマノツタ・ザザエ・オオタニン				
7	ヤマトシジミ		鹿田1次調査	井戸21	平安末(11c後半)
8	シジミ・ハイガイ		鹿田4次調査	河道	平安(9c)
9	シジミ		鹿田5次調査	井戸(3)	平安

## (2) 各時期の概要

## a. I期 (表4)

本時期には獸骨の出土は見られないため、ここでは井戸出土の種子について検討を行うこととしたい。

出土する種子の種類としては、モモ・ウリ・ヒョウタンに加えクルミやトチといった堅果類が挙げられる。出土する遺構としては井戸に集中しており、現在までのところ、他の遺構からの例は認められていない。井戸は、鹿田遺跡に集中する。これは、津島地区が弥生時代以降水田として利用されていたのに対して、鹿田地区は集落を形成していたためである。<sup>すり</sup> 1~6次の調査によって合計49基の井戸を検出している。本時期に属するものは、その内の22基で、種子が出上する井戸は11基、全体の50%を占める。では、こうした種子は何を表しているのであろうか。

井戸から出土する遺物を考える上で問題となるのは、井戸の最終的な廃棄方法である。つまり、ただ単に使用済みのものとして放置して自然埋没したものか、何の行為もなく埋め戻されたものか、あるいは何等かの行為を行なながら人為的に埋められたものか、という点である。前の二者であれば、出土遺物は偶然性の高いものとなってしまう。しかし、何等かの行為、つまり、井戸を埋めるに当たって為すべき非日常的行為（以下、便宜的に祭祀的行為と称する）<sup>いんし</sup> が存在するとするならば、出土遺物は必然性の高いものとなり、それらの動向は注目に値する。このように出土遺物の意味を考える上では、そうした行為の有無を決めることが不可欠であり、出土種子についても、考える前提として、この点を踏めておく必要がある。本論とはやや離れるかも知れないが、井戸廃棄時の祭祀的行為についてここで簡単に検討を加えたい。

井戸における祭祀的行為を復元することは非常に難しい問題ではあるが、ここでは、注目する要素として遺物の出土状況と埋土の状況を取り上げ、それについて特異な項目を選び出して検討することによって、そうした行為の有無を決定し、その上で種子との関係を考えることとする。

まず、遺物の出土状況については次の2項目が挙げられる。1点は遺物が不自然な状態でおかれていることである。つまり、完形あるいは完形に近い状態の土器が、流入土とは考えられない中層～底のある位置にまとめて出土し、本来は故意におかれたと判断される場合である。2点は特殊な器種がある一定条件のもとに入れられていると判断されることをあげたい。具体的には、非日常的な要素の強いミニチュア土器あるいはそれに類する土器が、完形あるいは完形に近い状態で井戸の底から出土する例に限定している。他の例、つまり、特殊な形状の壺や手造り形土器などの出土例も認められる（1次調査井戸17）が、一定の条件での齊一性が認められないことからここでは除外した。埋土については次の4項目を設定した。1点は純粹な

炭・灰層が1cm以上認められることあるいは多量の炭化物を包含する層が認められること、2点は焼土が多量に堆積すること、3点は井戸下半に植物質を含む厚い有機物層が明瞭に認められること、4点は赤色顔料を包含することである。これら6項目についてその有無を取り上げ、6項目中半数の3項目が認められるものに関しては祭祀的要素を強くもつ井戸と考えることとした。

以上の前提で各井戸を検討し、種子との関係を示したのが表4である。祭祀的要素の強い井戸として12基が抽出できる。全体(22基)に占める割合は55%である。また、種子が出土する井戸11基のうち9基がこの中に含まれ、祭祀的要素の強い井戸の75%を占める。前述したように全体の井戸の中に占める割合が50%であるのに比べて高い数値となる。種子を含んでいて3項目以上に達しない井戸は2基(1次調査の井戸2と井戸9)が確認されている。井戸2は井戸枠を有し、底部に完形に近い高杯が入っている。周辺には僅かに炭化物が認められた。井戸9はやはり底部に完形の甕・小形鉢が認められている。いずれも埋土に特異性が認められず、項目的には要素が低くなっているが、上器の出土状況から何等かの行為が存在したことを想定することもできる。そして、全く何も要素が認められない井戸では種子は検出されていないのである。以上のことから、祭祀的要素の強い井戸と種子が密接な関係を有していた、つまり、種子が祭祀的行為の中で重要な一要素となっていた可能性は高いと考えられる。

では、種子の中での各々の種類はどのような状況で出土しているのであろうか。まず、出土している種類は、前述したようにモモ・ウリ・ヒョウタン・堅果類である。それぞれの出上件数を数えると、モモが10基の井戸から、以下、ウリ3基、ヒョウタン2基、堅果類5基である。祭祀性の高い井戸12基の中での割合ではモモ8基(67%)、ウリ3基(25%)、ヒョウタン2基(16%)、堅果類4基(33%)となる。モモの出上率が7割近い値を示し他と比べて突出している点は注目に値する。また、種子を出土する井戸でモモが含まれないものは1基のみで、出土種子は堅果類の果皮に限定されている。1例だけのため、取り上げるには問題があるかも知れないが、モモなどの収穫時期が夏、そして、堅果類の果皮に限定されることを考えると、この井戸の廃棄時期が秋から冬にかけてであったため、モモが入らなかった可能性が想定される。

このように、モモ・ウリ・ヒョウタン・堅果類といった種子は祭祀的行為に結びつく可能性が高いが、その中でも特にモモはその中心を為しており、重要な要素として考えられてきたことが窺われる。そして、井戸の廃棄時期についても、湯水期にあたる夏期がその中心となっていたことも種子の出土状況から言えるのではないだろうか。

表4 I期(弥生~古墳初頭)の井戸

時 期	調査地点 (発掘時)	遺構番号 モモ	種 子 貝	主要項目						合計
				①	②	③	④	⑤	⑥	
中期後半	1次調査	1	3	ウリ、雑草 ヒョウタン	○	△	○	○	○	5.5
後期前半	タ	2	2	トチ、クルミ イヌガヤ	○	×	△	×	×	1.5
	タ	3	0	×	○	×	○	○	×	4
	2次調査	1	6	クルミ	○	×	○	○	○	4
後期後半	1次調査	4	0	×	○	×	○	○	×	3
	2次調査	2	0	×	○	×	×	×	○	2
	タ	3	0	×	○	×	×	×	○	1
	1次調査	5	0	×	×	×	×	×	×	0
	タ	6	6	×	○	○	○	○	○	5
	タ	7	4	×	○	○	○	○	×	4
	タ	8	0	×	○	×	×	×	×	1
	タ	9	1	×	○	×	×	○	×	2
	タ	10	2	×	○	×	○	○	○	3
	タ	11	0	×	×	×	△	×	×	0.5
	タ	12	0	トチ、クルミ	○	○	×	○	○	3.5
	タ	13	12	ウリ、クルミ カシ	○	×	○	○	○	5
古墳初頭	タ	14	1	×	○	○	×	○	○	4
	タ	15	6	ウリ、ヒョウタン	○	×	○	○	○	4
	タ	16	0	×	×	○	○	×	×	2
	タ	17	0	雑草	○	×	○	×	○	3
	タ	18	0	×	○	×	○	×	×	2
	タ	19			<破壊で不明>					
	5次調査	(8)	0	×	○	○	×	×	×	1

①: 完形あるいは完形に近い遺物が不自然な状態で置かれていること

②: ミニチュア土器あるいはそれに類する土器が底部に置かれていること

③: 灰・灰層あるいは多量の灰を含む層の存在

④: 級上を多量に包含する層の存在

⑤: 植物質を中心とした有機物を多量に包含する層の存在

⑥: 赤色顔料の存在

○: 非常に濃着

○: 認められる、①では点数が少ないと定形の場合を示す。

△: 類する状況

×: 認められない

その他については出土数を示す。

合計ポイントは○○を1点、△を0.5点で計算している。

## b. II期

本時期は、種子・獸骨について井戸と溝・河道でのあり方を検討する。

## ① 井戸 (表5)

検出井戸の総数4基の内で種子を出土した井戸は3基である。I期と同様にして、祭祀的要素の存在を探るため、諸要素を挙げたのが表5である。まず、埋土の状況からは、炭化物層が少し認められる程度で、際だった要素を抽出することはできないが、遺物面では種子を出土した井戸3基については、表でもわかるように、非常に共通性の高い状況が認められる。つまり、いずれも大形の井筒を持ち、井戸の底から斎串・櫛・尖り棒・刀子・曲物といった木製品・鉄製品が組合わざって出土するのである。1次調査地点の井戸20出土の刀子は木製であり、明らかに祭祀具である。また、斎串についても呪符的な要素が認められるなど、いわゆる祭祀具と見なすことのできる遺物が集中的に出土している。こうした中で、種子の出土状況をみてみると、モモが3基（祭祀的要素の強い井戸に占める割合：100%）の井戸から出土し、以下センダン2基（同：約67%）、ヒョウタン2基（同：約67%）、ドングリ・マクワウリが各1基（同：33%）である。センダンが新たに出現しているが、全体的な傾向はI期と同じで、モモが祭祀的要素と深く結び付き、他にウリ・ヒョウタンが続くという状況は変化していない。このように、本時期には、井戸廃棄時の祭祀的行為において、種子については從来通りモモが密接に関わっていると考えられるが、I期と異なる点として、斎串・櫛・刀子・曲物などのいわゆる祭祀具が重要視されてきていることが挙げられる。<sup>(註5)</sup>

## ② 溝・河道

獸骨・種子を出土するのは、II期の段階の鹿田地区と津島地区の遺構である。

鹿田地区では3・4次調査において、河道から種子・獸骨が出土している。種子としてはモモが1点、そして、獸骨としてはウマ・シカ・イヌが認められている。少し詳細に出土地点の状況を説明すると、この河道では、カヤ・モミ属・アカマツの柱6本が確認され、橋脚遺構の存在が想定されている。それに加えて、護岸あるいは堰の機能を有すると考えられる多数の杭群も検出された。調査面積は狭くそうした重要な構造物が集中した地点であった。ここから出

表5 II期（平安）の井戸

調査地点 (免罰時)	遺構番号 モモ	種 子	其 他	木製品など (点数)					埋土内 炭化物	備 考
				斎串	櫛	尖棒	刀子	曲物		
1次調査	20	10 ヒョウタン、センダン	○	1	2	3	1	1 (完形) 6 (底、破片)	○	井筒
2次調査	4	8 ウリ、クルミ、カシ	×	3	1	1	1	0	○	タ
3次調査	(3)	2 ヒョウタン、センダン		1			1	2 (底、破片)		タ
4	(5)	0								破壊

上したのは馬の顎骨及び歯の部分である。取り上げ後接合が進み、1頭分が復元された。出土した獸骨が頭部に限定されていることは注目される。シカ・イスが出土した地点は、同一の河内ではあるが、この杭群からは離れた地点で、構造物などは認められない。

津島地区では、津島岡大6次調査において、条里の坪境に当たると考えられる位置に東西方向の大溝が検出され、その中から種子・獸骨が出土した。種子はモモ・センダン、そして、獸骨はウマの歯である。出土地点の状況は施田と似た状況で、水利調節用の杭群が広範囲に検出されている。

このように、河道あるいは溝のなかでその機能上重要な地点において、モモやウマに関連したものが出上する傾向が窺える。I・II期の井戸でモモの出土例が多いことと共通する点は重要である。

#### c. III期（表6）

鹿田地区ではこの時期に属する井戸で底部まで確認できたものは23基である。その中で、種子を出土するものは10基、全体の43%を占める。数値だけをみると、I期の井戸総数22基に対して種子出土井戸11基の割合と大差は認められず、井戸と種子の関係に変化は無いように思える。しかし、詳細に検討すると、その様相にはかなりの隔たりが生じている。それを明確にするためには、やはり、井戸の埋没状況を明確にする必要がある。いくつかの要素に注目してまとめたものが表6である。

これを概観すると、埋土についてはI期と同様に炭化物層の存在が比較的多く認められる。そのほかではあまり特徴のあるいは共通性の高い上層関係は認められない。一方、遺物のあり方では、器種的な偏りをみると、曲物・椀・小皿の出土例の多さが目を引く。ここで数多く出土する曲物は径15~20cm、高さ15cm前後の小形の完形品あるいは底板の可能性が高いものである。いずれも井戸の底部あるいは底に近い位置から出土する。23基中10基、全体の43%を占める。木器出土井戸の中では15基中10基となり約67%と高い数値を示す。次に多い箸が5基で33%程度であり、木器の中での偏りは明瞭である。しかし、出土数が多いことだけでそれが祭祀的行為に結び付くとは言い難い面も残っている。つまり、曲物が井戸利用に関わる機能を持つ場合は当然使用時の偶然性が高くなることは考慮する必要があろう。この点についてはもう少し検討を加える必要があるとは思うが、ここでは曲物の形状から釣瓶的機能を想定するには紐掛け部分が無いことや出土する底板は全体の1/3~1/2程度の破片であることが多く、接合するものはほとんど無いことなどから、使用時の破損とは考え難い点を重視し、何等かの意味をもって入れられた可能性を考えたい。

上器については、井戸全体から出土するわけではなく、出土位置は大きく上層・中層・下層・底部の3ヶ所に分けられる。その中で、最も必然的行為と結び付く可能性が高く、検出例の

多い下層～底部で出土するものに注目してみよう。下層～底部と言うように幅があるのは井戸の埋没時の底面がどこにあるかによって底面レベルの移動が考えられるからである。底面が上昇する条件は様々であり、それらを区別することは困難であることから、井戸下半において最初に完形に近い土器が置かれた状態のものはこの範囲に入ると考えている。器種的に最も多いものは碗で、井戸底部まで確認した20基中11基において認められている。全体の55%にのぼる。小皿については5基、25%である。占い段階では小皿が比較的多いが12世紀には柄を中心となる。このようにある器種がある位置に集中する現象はやはり意識的なものと見なすことができる。今回の目的とややずれるためこれ以上の検討は略すが、本時期での井戸廃棄時の祭祀的行為の要素としては少なくとも炭化物層の存在、曲物の存在、椀・小皿の存在が挙げられる可能性が高いと考える。以上のような前提で祭祀的行為を想定させる井戸を抽出すると19基にのぼり、全体の83%を占める。

種子については前述の3要素から祭祀的要素の強いと考えられる井戸19基のうち9基から出土しており、47%を示す。ある程度の数値はでているが、Ⅰ期では12基中9基で75%、Ⅱ期では3基中3基で100%に比べると低下現象は明瞭である。また、その中で種類別にみてみると、モモ・ウリが19基中5基(26%)、以下、堅果類2基(11%)、ヒョウタン・センダン各1基(5%)、穀類3基(16%)という出土状況を呈し、かつて非常に高い比率を有していたモモ

表6 Ⅲ期(平安末～中世)の井戸

調査地点	遺構番号 (発掘時)	種子	歯骨	本製品他(点数)			井戸底部 出土遺物	埋土 炭・成土	備考
				曲物	著	その他			
1次調査	21	コメ ウリ		2	スリコギ、刀子			○ ○	木組枠
5次調査	(7)	コメ他 ウリ		○ ○	椀、下皿、杓子		椀・匣・木器	○ (縦)	
1次調査	22		ウツ				椀	○ ○	
	23	オナモミ		1	1		曲物・椀	○	
	24				浮き、瓶子				破壊
	25				1 (井筒)				
	26	1			1		小皿	○ ○	
	27						椀・小皿	○ (縦)	
3次調査	1					1	堅果、栓	○ (縦)	下半未掘
	2	コメ ウリ、センダン						○ (縦)	
1次調査	28	2			1	株	椀	○	
	29				1 (完)		椀・木器	○	
	30	1			1		×・曲物	○ ○	
2次調査	5					浮き	×・小皿		
5次調査	(2)	1		ウシ	○ ○		小皿・ウシ		
	(4)	3			○ ○	椀			
1次調査	31								
2次調査	6						椀		
1次調査	32								
	33								
5次調査	(1)								
6次調査	(1)	○	ウリ		○ (完)		椀		

の激減が特徴的である。また、種子の組合せをみてもかつては種子出土井戸の90%以上を占めていたモモが、10基中6基、60%まで下がっている。行為の不明確な井戸からの出土例も1例認められる。以上のことから、全体的に祭祀的行為の中に占める種子の重要性の低下が進み、特に、モモについては從来から担っていた他の種子とは區別されるその特異性を消失するという変化が認められる。ところが、こうした流れの中で、新たに出現する種子もある。コメ・ムギといった穀類である。<sup>第1回</sup> 3基の井戸からの出土ではあるが、意識の変化が生じていることを示すかのよう興味深い。そのほかに獸骨の出現も注目に値する。ウマ・ウシの骨が1例づつ認められる。これについては、特に祭祀的要素が強い状態で検出された。1次調査地点の井戸22では井戸の上部に多量の炭化物を伴って1頭の馬骨が出土した。それらの骨の上部に頭蓋骨が置かれた状態で、頭骨には致命傷となった傷が確認されている。解体後の埋納が考えられる。<sup>第1回</sup> 下層からは挽が出土している。また、5次調査地点では木綿井戸の底部中央にウシの頭蓋骨が1個、逆転して置かれている。下顎骨は無い。周囲の四隅には小皿が立てられていたようである。<sup>第1回</sup> いずれも頭部が特別扱いされている点で共通する。

前述のⅡ期の溝では既にウマの出土例が認められており、Ⅲ期には広範囲にそうした意識が普及することが窺われる。

### (3) まとめ

以上のように見えてくると、井戸における祭祀的行為の中で自然遺物の占める位置が時代と共に変化することがわかる。ここで全体をもう一度まとめてみたい。

まず、種子と井戸における祭祀的行為との関係について見てみよう。

図1は表7に挙げた井戸総数に占める祭祀的要素の強い井戸の割合を示し、それに種子を出土した井戸の割合を重ねたグラフである。祭祀性の高い井戸の全体に占める割合の変化はⅠ期には55%程度であるが、Ⅱ期には75%、Ⅲ期では83%にまで上昇する。Ⅱ期の井戸については先述のように数が少ない上、その性格上、他の時期と同一に考えることはやや問題が残るが、少なくともⅢ期には内容の差はある。何等かの祭祀的行為が大半の井戸で行われはじめていることが想定される。そうした状況の中で、種子の出土する比率を見ると、Ⅰ期では全体では50%，祭祀性の高い井戸の中では75%，Ⅱ期には前者で75%，後者で100%，Ⅲ期では前者で43%，後者では47%である。これでわかるように、Ⅱ期とⅢ期の間で大きな変化が存在する。Ⅰ・Ⅱ期では祭祀性の高い井戸に占める割合が非常に高く、全体に占める割合と大きな差を示す。それに対して、Ⅲ期には、両者間に差は認められず、数値も低い。つまり、Ⅰ・Ⅱ期には、特に祭祀と種子の結び付きが強い可能性を窺うことができる。

次に、種子の中での各種類の状況を見てみよう。

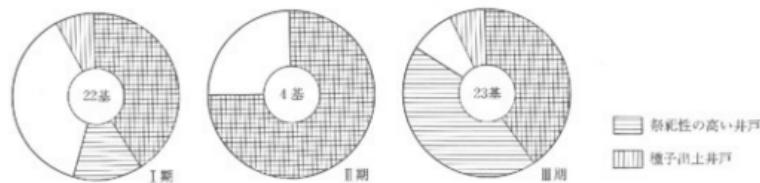


図1 祭祀性と種子の関係

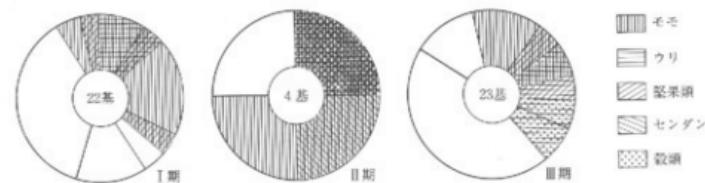


図2 井戸出土種子組合せ

表7 各時期の井戸に占める自然遺物一覧

時期	I	II	III	I~III合計
井戸総数	22	4	23	49
祭祀井戸数(総数比)	12 (55%)	3 (75%)	19 (83%)	34
種子出土井戸数 対総数値 対祭祀値	11 (50%) 9 (75%)	3 (75%) 3 (100%)	10 (43%) 9 (47%)	24 (49%) 21 (62%)
モモ出土井戸数 対総数値 対祭祀値	10 (45%) 8 (67%)	3 (75%) 3 (100%)	6 (26%) 5 (26%)	19 (39%) 16 (47%)
ウリ出土井戸数 対総数値 対祭祀値	3 (14%) 3 (25%)	1 (25%) 1 (33%)	5 (22%) 5 (26%)	9 (18%) 9 (26%)
ヒョウタン出土井戸数 対総数値 対祭祀値	2 (9%) 2 (16%)	2 (50%) 2 (67%)	1 (4%) 1 (5%)	5 (10%) 5 (15%)
堅果類出土井戸数 対総数値 対祭祀値	5 (23%) 4 (33%)	1 (25%) 1 (33%)	2 (9%) 2 (11%)	8 (16%) 7 (20%)
センダン出土井戸数 対総数値 対祭祀値	0 0	2 (50%) 2 (67%)	1 (4%) 1 (5%)	3 (6%) 3 (9%)
穀類出土井戸数 対総数値 対祭祀値	0 0	0 0	3 (13%) 3 (16%)	3 (6%) 3 (9%)
牛・馬出土井戸数 対総数値 対祭祀値	0 0	0 0	2 (9%) 2 (11%)	2 (4%) 2 (6%)

出土種子の種類としてはモモ・ウリ・ヒヨウタン・堅果類・センダン・穀類が挙げられる。種類の数としてはかなり限定期的であり、選択された種子と考えることも可能であろう。

この各種子の出土率を検討したい。図3は各種子の出土率を表している。円周部が100%の出土率となる。ここにおいても、I・II期とIII期との差が明瞭に見て取れる（図3-1）。I・II期では新たに出現する種子の存在を除くと、共にモモにピークがあり、祭祀的要素の高い井戸に占める割合（太線）が全体の井戸総数に占める割合（細線）を上回る差についてもほぼ共通している（図3-2・3）のに対して、III期ではピークもなく両者の差も認められず、種子の占める割合も極端に縮小している（図3-4）。図3-5では祭祀性の高い井戸の中での種子の出土率を示しているが、そうした傾向はより一層明瞭に認められ、そのラインはI・II期ではほとんど一致している。次に、図2にかえって各々の種子の組合せを見てみよう。I・II期ではモモの出土を示す部分に他のほとんどの種子が重複している。例外はI期の堅果類のみを出土する1基だけである。ところが、III期ではモモとウリが同率を占め、両者の重複

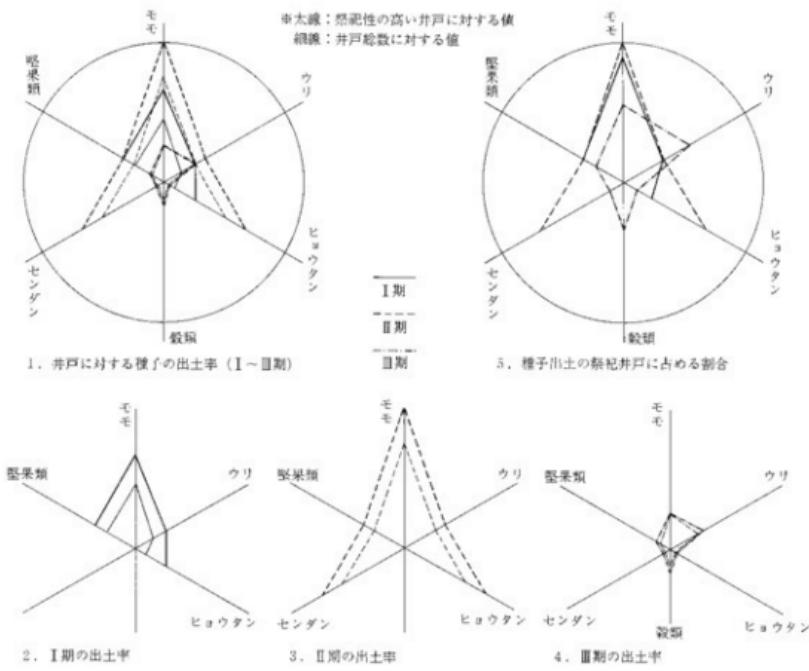


図3 種子の出土率

は1基のみである。そして、他の種子はウリと重複する傾向が強く、堅果類・センダン・穀類が含まれる。モモとの重複は堅果類1例のみである。以上のように、種子の中ではⅠ・Ⅱ期にはモモが他の種子に対して、圧倒的優位を占めているが、Ⅲ期にはそのモモの出土数の低下から種子全体の祭祀的行為に占める割合も減少し、あるいは種子の中では、ウリにとって代わられる可能性も考えられる。このように、種子の種類や組合せにおいてもⅡ期とⅢ期の間に差が認められる。

井戸出土の種子からは以上のようなことがわかつた。それに加えて、獸骨の出現も考え合わせると、Ⅱ期までは祭祀上、重要な役目を果たしていた種子、特にモモの存在とそれにとって代わるかのようにⅢ期に出現する牛・馬（特に頭部）・穀類の出現、そしてⅢ期にはすでにある程度のセット関係が成立していたと考えられる祭祀具の存在など、Ⅲ期、つまり平安時代を境とした祭祀上の様々な変化を窺うことができるようである。

こうした現象は、井戸がその集落内でどういうものとして存在したか、その社会的違いの現れであると考えられる。このように、自然遺物からも様々な状況を考えることができる。ともすれば見落とされがちな遺物ではあるが、今後の積極的な分析を期待する。

## 註

1. 種子・獸骨についての報告としては以下の報告がある。

森下典之「鹿田遺跡から出土したメロン仲間 *Cucumis melo* L. の種子、特に雑草メロン型の小粒種子について」『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊 1988年

松谷曉子「岡山大学構内遺跡から出土した炭化種子と灰灰について」『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊 1990年

松井章「鹿田遺跡（Ⅲ・Ⅳ次調査地点）出土の動物遺存体」『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊 1990年

2. これまで構内遺跡で出土したものについては以下の方々の御協力によって同定が成されている。

木器：畔柳 鎮、能城修一、種子：笠原安大、武田満子、粉川昭平、松谷曉子

骨：島海 衛、松井 章、貝：船葉明彦

3. 種子については同じ種類の遺構においても、その採集方法によって検出されるものに差が生じることが考えられる。本来ならば、対象となる遺構の土壤あるいは可能性のある部分の土壤の全てを同一のレベルで水洗・選別して比較する必要がある。しかし、現状では多くの遺構で一部の土壤の洗浄にとどまっているため、草本類を中心とする小型の種子の確認例は僅かである。また、遺構内に入る偶然性の確率を考えた場合、モモ・ウリなどのような大型のものに比べ小型種子の確率が高いと想定される。以上のことから、ここでは草本類などの小型種子を対象物から除外している。

4. 能城修一氏によって構内遺跡出土の木製品についての総括的な分析が行われており、津島地区的遺物については1～6次調査分の報告が本年度刊行予定の『岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊』に、ま

- た、鹿田地区出土の遺物については1～5次調査分が来年度刊行予定の『鹿田遺跡Ⅲ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告にそれぞれ掲載する予定である。
5. 近年の調査では、津島地区において検出した縄文時代の貯藏穴内埋土の土壤をほとんど全て洗浄し種子を選別する作業を実施している。様々な種子が出土しており、種子の同定に期待がかけられている。
  6. 「鹿田遺跡Ⅰ」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊 1988年 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
「鹿田遺跡Ⅱ」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊 1990年 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
「岡山大学構内遺跡調査研究年報5」1988年 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
  7. 「祭祀的行為」と言う名称について、その内容が明確にされない状態で使用するのは問題ではあるが、ここでは、何かを意識して故意に行われた非日常的な行為として便宜的に呼称したい。
  8. 井戸の祭祀を考える場合、井戸廃棄時の行為の他に、使用時のそうした行為の存在も考慮する必要がある。しかし、現実に得られるデータは廃棄時の状態であり、特に、後者を区別することは困難であることから、ここでは本論の目的ともはざれるため厳密な区別をせず、廃棄時に重点を置いた形で祭祀性を考えることとする。
  - 井戸の祭祀についての指摘は以下のような研究においても行われている。
    - 水野正好「竹筒をのこした一井とその秘祝」『草戸千軒』No.6 1976年 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
    - 中野雅美「弥生・古墳初頭の井戸」『考古学と関連科学』1988年 雄木義昌先生古稀記念論文集刊行会  9. 種子を出土しない井戸1基はその半分を他の井戸によって破壊され、本来の状態を残していない。
  10. 鹿田遺跡の平安期の井戸については、その出土遺物に墨書き土器・鉢用便・木簡・丹塗り土師器などが含まれていることや、他の遺構群との関係から、公的な要素を強く有していた可能性が高い。そのため、前後の時期と同一レベルで比較することは問題が残ることは否めない。しかし、少なくとも、種子に対する意識がこの段階までは一期と変化していないことは明白である。
  11. 「鹿田遺跡Ⅱ」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊 1990年 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
  12. 「岡山大学構内遺跡調査研究年報6」16～17頁 1989年 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
  13. ここでは種子との関係が本論であるため、鹿田遺跡で出土例の多い山物にのみ注目して検討したが、他の遺跡では箸なども多量に出土する例が多々認められており、他の遺物についても要素として取り上げられる可能性はある。
  14. Ⅰ期（弥生時代～古墳時代初頭）の井戸から穀類が出土した例として、川入遺跡が挙げられる。弥生時代後期に属し、炭化米・糧が検出されている。報告書では詳細は不明であるが、上器の器壁に付着して出土した可能性が高いということである。こうした出土状況を考えると、祭祀的行為に伴って必然的に入れられたものではなく、土器に伴う偶然性の高い資料と考えられるため本論での対象とはないものである。
  - 「山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集 1974年 岡山県教育委員会
  15. 「鹿田遺跡Ⅰ」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊 1988年 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
  16. 「岡山大学構内遺跡調査研究年報5」 1988年 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
鹿田5次調査の発掘調査報告は現在作成中で来年度に刊行予定である。
  17. 図3は円周部を100%として出土率を示している。図3-1は各種子出土率を井戸総数に対するものと祭祀的な井戸に対するものとにわけて表し、図3-2～4では図3-1を時期別に分離している。図3-5は祭祀性の高い井戸の中で種子を出土したものに対する各種子の出土比率を示すものである。全体の井戸に對するものについては、対祭祀井戸の図と大差ないため省略している。

1991年12月10日 印刷  
1991年12月10日 発行

岡山大学構内遺跡調査研究年報 8 1990年度

編集 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
発行 岡山市津島中3丁目2番1号  
(0862)52-1111(内線246)  
印刷 サンコー印刷株式会社  
総社市真壁871-2  
(08669)3-2121代